
科学と魔法の異世界

とんび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学と魔法の異世界

【Nコード】

N8346X

【作者名】

とんび

【あらすじ】

主人公である立花遼一^{たちばなけいいち}は死んだ。いや、神に殺された。神はミスで遼一を殺してしまい遼一は能力をもらって転生することになった。

※主人公は基本チートですが基本、平和主義者です

※不定期更新になります

プロローグ（前書き）

なんか思いついたので書こうということでノリで書きました。
なんかすみません。

プロローグ

「ここどこ」 そういいながら一人の少年が何もない空間でうろろする。

「はあー一体何？ 本当に面倒だなく…よし！寝るか」 そう言って少年は寝転ぶ。

「おい、立花遼たちばなりょういち起きてくれ」

「誰あんた？ 幼女ってことは迷子か…じゃあそう言うことで」 そう言ってまた遼一は寝る。

「いやいや！ 待ってくれ私は神だ！ 決して迷子の幼女ではないぞ！？」 金髪の幼女は言う。

「…そうかそうか、迷子で頭がいかれたんだな。病院へ行って来い。そして僕にしゃべり掛けないでくれ」 そう言って遼一はまた寝る。

「…先に言っておこう。遼一、お前は死んだ。それも私のせいで」

「…僕が死んだ？…夢だよな。じゃあ寝るか」

「お前は一流の国立の大学の医学部に見事に合格、両親ともに医者、跡継ぎをするために遼一は医者になる…ここまで言えばそれが真実だと信じてくれるか？」

「…ようするにストーリーカーさんだったのか。今の若者は何をしてるんだか」 遼一はそう言ってまた寝る。

「…なあ、遼一よ本当に信じてほしいのだが…」ものすごく落ち込んでいたので遼一は弄るのをやめた。

「で、ようするにお前のミスにより、俺を間違って殺したと言うわけね」

「そ、そうだ。だから本当にすまない！」神は遼一に頭を下げる。

「…あっそう。で僕はこれからどうするの？」

「あっさりしているな…まあいい、早速だがお前に神の称号を与えて、さらに転生させる。」

「…神の称号って僕は神様になるのかい？それに転生ってなんだよ」

「私の次に偉くなるのだ。転生はお前のいた世界に似ているところになるな」

「…お前はどのくらい偉い？しかも元の世界にかえれないのかよ」

「私はどの次元、事象においても一番偉い。天使や低級の神など使いたい放題だ。ちなみに元の世界には帰れないぞ？」ない胸を張りながら自慢する。

うぜーなく人を勝手に殺しておきながら…遼一はそんなこと思う。

「…なんでだよ」

「ここに遼一がいる時点で神様決定だからだ。ちなみにここに来な

かったら輪廻に行って人ではないものに転生していたな」

「おいおい、だからと言って神様は地球に降りちゃいけないのかよ」

「だって転生しないと地球にいけないよ？しかも、いつに転生するか分からないし」

「どういうことだ？」

「地球はね特別すぎるんだよ。精霊もないし、魔法もない、しかも神の力が干渉にくいんだ。だから、転生したら千年後っていうのもありえるよ。その時の地球はどうなっているか知らないけど」

「ここに残るという手段は？」

「ダメそれは私が許さない！」頬を膨らませていう。

「あ？なんでだよ」睨みつけながら言う。

「世界というものを知って欲しいからだよ。たった19年しか生きていないのにそれはいけないことなんだよ？」

「ここから世界を見るんじゃないか？」

「体験はできないでしょ？実感をして欲しいんだよ」

「はあ：わかった。ならお前の言うところに転生する」

「そうそう、最初からそうすればいいんだよ」うんうんと神は頷きながら言う。

「とりあえず、転生するなら早くしてくれ」

「ああ、言い忘れていたけど、君に特別な能力をあげるよその名も【速度操作】さ」

「…でどんな能力だ？」

「あらゆる物の速度を操れるんだ。ちなみに魔力使わず発動できて、範囲制限はない。チートだよチート。それプラス私の神の能力もあげるよ。能力は何でもできるだ」

なんだよ、【速度操作】ってよ。使えない臭いがぷんぷんするし。神の能力だけでよくねえか？

「今、使えないって思ったでしょう」ジト目で神は遼一を見る。

「ああ、思ったけど」

「簡単に認めるんだ…まあ使って見たらわかるよ。ちなみに使える能力だったらどうするの？」

「あ？そうだな…僕が一回だけ何でも言うことを聞くんてどうだ？」

「いいね！それいいね！」めっちゃはしゃぎだす。

「じゃあ使えない能力だったら、お前も僕と同じな」

「ええ！？まさかあんなことや、こんなことを…」顔を赤くしながら

ら言う。

何考えてんだ？この少女は…遼一はため息をつく

「それよりも、お前殴っていいか？…やっぱりアイアンクローな」
遼一は神の頭を掴もうとする。

しかし、頭を掴めずそのまますり抜ける。

「私には効かないよ。残念でした」神はにやにやしながら遼一を見る。

「つまんねえ。お前に攻撃できないなんて」遼一はガチで睨む。

「…いや、冗談でもおもしろくないからね？」遼一の睨みにビビって神は冷や汗だらだらだった。

「本気だよ。ほ・ん・き」遼一は上から目線で言う。

「あっ！そうそう言い忘れていたけど、神の能力は10歳で開花するようにしていたから」神は無理やり話をそらした。

「なんでだよ？」

「だっていきなり上限なしで炎とか出したらびっくりするでしょ？」

「まあそうだな、魔法なんて使ったことないし」

「だから、段々と上限をなくしてって10歳には上限なしで魔法が撃てるようにするから」

「ああ、わかった。僕もそれの方がいいと思うよ」

「了解、それと不老もオプションしとくね。18歳で容姿は止まるように設定しておいたから」

「…いらねえだろ、不老なんて僕でも出来るだろ」

「ふふふ、それと別のものも用意したからね」神はそう言いながら不敵に笑う

「おい、一体なんだそれは」

「ひ・み・つ♪」

「…殴るぞ？てめえ」

「…とりあえず、連絡があるときはこっちからいれるよじゃあ頑張っ
てね」

するといきなり遼一の下に穴が開いてそのまま落ちていった。

「おぎゃおぎゃー！ー！ー！！！」

「あなた、元気な男の子ですよ？」

「ふふ、お前の名前は遼一だ。よくやったな涼子」

「ああ、遼一、愛しの遼一」

あゝあ、生まれたよ俺…と遼一はそう思いながら眠りについた。

1話 二歳になったけど暇だよ!!

あれから二年たった。なんで二年たったかはそれは特に何もなかったからだ。

あったとしたら、父親の名前が立花 祐一^{たちばな ゆういち} 25歳で金髪碧眼のイケメン。母親は立花 涼子^{たちばな りょうこ} 25歳金髪碧眼の美人

姉が立花 菜々子^{ななこ} 5歳金髪碧眼で美少女、あとは自分の家が貴族っていうことかな。みんな元いた世界の家族と同じ名前で同じ家族構成だ。ていうかなんで皆、日本人の名前なんだよ！金髪碧眼ってなんだよ！前の家族と全然似てないよ！遼一はそんなことを思いながらベットに寝転がっていた。

「遼一！愛しの遼一！」同じベットで転がっている母親の涼子が頬ずりをしてくる。

「かあさま、くすぐりたい」

「だめよ、あなたは私から離れていけないの。いや離れたら私生きていけない！」そのまま涼子はを抱っこする。

「そのとおりだ！遼一はいくら跡継ぎとはいえ他の女にはやらんぞ！！絶対にだ！！」父親の祐一が抱きつく。

「私は絶対に弟の遼一を守りますわ！そして女が寄ってきたら潰します！！」姉である菜々子も抱きついてくる。

なぜこんな風になった…平穩はどこに行ったのだ！？面倒だから寝るか。とりあえず遼一は寝た。

起きたら、姉の菜々子が隣にいた。抱き枕にされていた。

くそ！抜け出せねえ！てか重い！遼一は必死に動いたが無理だった。

「ねえさま、おきて、おきて」とりあえず、必死に起こした。

「んあ…遼一起きたの？…どこに行くの？」とりあえず束縛から逃れたので部屋を出ようとしたら止められた。

「といれです」二歳児の口調でしか言えないことに辟易しながら言う。

「一人ではだめよ？誰かと一緒に行かないと…私もついて行くわ」菜々子はそう言って遼一を抱っこする。

「ねえさま、ぼく、ひとりであるける」遼一は言う。

「だめよ、あなたがもしこけてケガをしたら私嫌よ？」

…どこまで俺は大切にされてんだよ。箱入り娘…いや息子ではないんだけど遼一は思わずため息をついた。

「ど、どうしたの？た、ため息なんてついて！ま、まさか病気！？」菜々子は慌てだす。

しまった！これだから面倒なんだよ

「ねえさま、なんでもないです！ためいきではなく、しんこきゅうです」遼一は慌てて言う。

「そ、そうなの？び、びっくりさせないでよね？」目に涙をためながら菜々子は言う。

…ああ、なんて面倒な家族なんだろう。遼一は心の中でため息をついた。

部屋に戻ると母親の涼子が泣いていた。

「遼一！！」そう言って涼子が抱きついてきた。

「かあさま？どうかしたんですか？」

「遼一！どこに行ってたの？私から離れてはいけませんよ！もし誰かに連れ去られたら」涼子は泣き出した

いやいや、トイレ行っただけですよ！？離れたっていつでも少しだけじゃん！思わず遼一は突っ込みを入れたくなる。

「かあさま、といれに、ねえさまといってきただけです」

「あら！菜々子と行ったの？だったらいいわレイは私たちに似て強いものですの♪」

「はい？どういことですか？」

「菜々子はね？一人で一瞬で小国を潰せる力を持っているのよ？さすが私の娘ね〜大好き♪」涼子は遼一と菜々子に抱きつく。

「私とあなたのお父さんはね、一瞬で大国を消せるわ。でも菜々子もすごいわ〜♪」涼子は菜々子を撫でる。

「ありがとうお母様」嬉しそうに菜々子は目を細める。

はい？今なんと・・・？？

「まあ、一年くらいあれば世界征服できるけどね？権力に私達は興味はないの…まだ遼一には難しいかな？」

リカイデキマセンヨ？…本当にどこに行ったんだよ僕の平穩は！…もういいや面倒だ寝よ。

「あらあら、やっぱり難しかったのね。お休み遼一、良い子に育つのよ？」

遼一は涼子にベットまで運ばれて寝た。

次の日、とりあえず、お母様とお姉さまが僕を挟んで寝ていた。お母様いつの間にベットに進入してきたんですか？はあ〜とため

息をつきそうになるのをこらえる。この部屋にベットが二つある。一つは両親ので、もう一つが兄弟のと僕が勝手に分けたのだが、

お母様はいつの間にか入ってきているのだ。：可愛いのはわかるけど三人は狭いんだよ。遼一は無理やり起き上がる。

起こさないようにそ〜っとベットから出た。いつもは失敗してすぐに捕まってしまうのだが、今回は成功した。

ふはははは！自由だ！自由を手に入れた！遼一は心の中でさげんだ。

あとはドアを開けるだけだ。そうだ！消音の魔法をかけて音を消そう。完璧だ！いいアイデアすぎる。

さあ、ここをでて何をしようかな？そう思いながら、遼一は風の魔法を応用して真空状態を作って音がでないようにした。そして、ドアに手をかけようとした瞬間

「遼一！そこから離れなさい！そのドアに魔法がかかってあるわ！
！」涼子が叫ぶ。

遼一はビククリしてその場から動けなかったため涼子が魔法を使って遼一を引き寄せる。

「祐一さん、敵は？」

「いや、気配がしない。本当に魔法を使ったのか？」

「お父様、人が進入した形跡ありません」

：なんなんだ！？この家族は！？魔法を感知？熟睡の状態で？人間じゃねえよ！人外だよ！！しかもなんだよ気配って家全体わかるの！？：：：そういえば僕もなんとなくわかるや僕も人外人外と

「遼一、やっぱりあなたは一人では危ないわ。絶対に一人になってはいけないからね？」涼子が遼一をそっと抱きしめる。

「ああそうだ。頼むから一人で行こうとしないでくれ」祐一は遼一の頭を撫でる。

「今度からお姉ちゃんを呼びなさい。そしたら一緒にについて行ってあげるから」菜々子も遼一を抱きしめる。

三人とも涙を流していた。

「はい、わかりました。とーさま、かあさま、ねえさま」

僕がやりましたなんていえるわけないし。…でも自由が欲しい。遼一も別の意味で涙を流した。

その事件以来、遼一の自由が遠くなったのは言うまでもない。

次の日、僕は暇なので何をしようと考えていたら、お母様が絵本を持ってきた。

絵本か…インターネットしたいよ…でも親の目の前で神の能力使えないよな…はあ…と遼一は心の中でため息をつく

「遼一、これはね絵本と言って、ほらここに文字が書いてあるのよ？」涼子はそう言って絵本を見せてくる。

これは、日本語じゃないか！どういうことだ？言葉は勝手に日本語に変換されていると思ってたのに：

「かえるのこ？」遼一は絵本に書いてあるタイトルを思わず読んだ。

「！？遼一この字がわかるの！？」涼子はびっくりした様子で遼一を見る。

しまった！！思わず読んでしまったよ！！どうしよう…誤魔化すしか…！！そう思って遼一は言おうとする。

「天才だわ！！この子は！早速、祐一と菜々子に知らせなきゃ♪」涼子はルンルン気分が出ていった。

涼子と入れ替わりに菜々子が入ってきた。

「ねえ！遼一！字が読めたって本当！？」菜々子が遼一の両肩を掴みながら言う。

「はい、なぜか、よめました」

「す、すごい凄すぎるよ遼一！！さすが私の弟だわ」そう言って遼一を抱きしめる。

…なんかめっちゃくちゃだけどまあいいか遼一は思った。

しばらくしたら、涼子が帰ってきた。

「遼一お父さんがね、データバンクにある本を読んでいいって」

「でーたばんくですか？」

「これよこれ」そう言って涼子は携帯型の端末を渡してくる。

：すげえよ携帯だよ！ここ文明進んでいるよ！ここの部屋から出たことないから分からなかったよ！！

「これはねここを押したら大きくなってここの電源を入れてこうしたらほら、本が読めるでしょ？」

タッチ式の端末でボタンを押したら縦、横30センチの大きさのディスプレイになり空中に電子キーボードが現れた。もろパソコンだった。

「ほら、やってみて」涼子はそう言って遼一に端末を渡す。

遼一は簡単に動かしてみた。：電話やメール、音楽プレーヤー、さらにインターネットにも繋がれるよ。データも沢山入るし最高だね。やりたい放題だよ。

「すごいわね遼一理解も早いし、応用もできてるわ」涼子は感心するように頷いた。

「遼一凄すぎだよ。：でもまたそこが可愛いかも」

「これ、もらっていいですか？かあさま」上目遣いで聞いた。

くれよ？マジで頂戴よ？暇すぎて死んじゃうからね？インターネットは偉大なんだよ！！もう中毒なんだよ！！文句あるか！！

「え、ええ、も、もちろんあげるわそのために持ってきたから」涼子は遼一を抱きしめながら言う。

ふふははは！最高だ～～～～！！！！異世界で！しかもインターネット！ロマンだよ！男のロマンだよ！！！！遼一は二人の見えないのをよしとして、黒い笑みを浮かべた。

さあ、廃人生活の始まりだ！！

とりあえず墮落？した生活が始まった。

はじめはさすがにこの世界について知るべきだな～っと思ったので調べてた。

…嘘だろ！？遼一は驚いた。

この世界の共通語はなんと日本語しかも全世界が基本、日本の姓を名乗っている。しかも世界地図は地球と変わりがない。お金も日本の硬貨、札を使用している。しかし世界の情勢は地球と大きく違っていた。

北アメリカ大陸を日本は支配していたのだ。

日本の首相は平賀^{ひらが} 伴内^{ばんない}若干22歳にして国を動かすエリートってやつか：すごいな

世界を相手に戦争の放棄や兵器の廃止条約、環境の取り組みなど全てにおいて実績を出している。

ちなみに首相は国民が選ぶらしい。首相は立候補または推薦をして投票となるらしいが、この平賀 伴内は投票を全て獲得したとなっている。ありえない：常識的に考えてありえない。どうやったらそうなるんだ？おっ写真があるじゃん

笑顔で写真に載っている黒髪黒目のイケメン伴内を遼一は見た。

イケメンか：死ぬ~~~~！！！！顔か？顔が全てなのか？どうなんだよ答える伴内！！っと訳の分からないことを遼一は思っていた。

どうやらこの国には帝王と言う一番偉い人がいるらしいが公には姿を見せないらしい。天皇みたいな感じかな？

：とりあえず分かったことは地球とあまり変わりが無いが、科学はすごく発展していて魔法も使える。そして日本はすごいわけね。

科学の勉強と魔法の勉強でもしようかな。

とかいいながら、結局アニメや小説を見るのであった。

2話 三歳だよ！魔法を教えてよ！そして外にも…！！

とりあえず三歳になった。言葉使いは上手くなり思わず涙が出そうになった。

毎日、アニメや小説を読んで暇つぶしをしていたけどね！でもね嬉しいんだよ！

ついにこの日がやってきた！！

…やっと魔法を習える！！と遼一はそう思いながら、父親、母親、姉に連れられ、庭にきた。

「遼一、今からお前に魔法を教える。三歳からと言う掟だが…5歳でいいか？」父親の遼一が言う。

「いえ！今からでも早速習いたいです！」いやだよ束縛して来るもん。未だに部屋くれないし…。

「くっ！親離れが辛い！あの頃の遼一は…」遠い目をして語りだした。

「お父様！早速教えてほしいのですが…」少し困り顔の上目遣いで言う。

「ッ！すまない私が悪かった！だからそんな顔をしないでくれ！」

必殺、家族落としの上目遣い！…使ったら罪悪感たっぷりになるよ。

「では始めるか魔法は魔力を通して使うものだ。この魔具まぐを使ってな。大切なのはイメージして魔法を出す。よく見ているよ」

魔具ってなんだ？あの杖のことだろうな。遼一はそう思いながら祐一を見る。

「発火」

杖の先から5メートル級の炎が一瞬出てきた。

発火の魔法ってこんなに大きんだ。

イメージか…まあとりあえずやってみるか

「発火！」遼一がそう言うのと手から2メートル級の炎が一瞬出た。

「「「・・・は？」」「」三人とも呆然としながら遼一を見ていた。

「お父様、手から普通に炎が出たのですが・・・」

「そ、そ、そのようだな！遼一はすごいぞ！」そう言って遼一を撫でてくる。

「遼一、まさかあの時魔法使ったのは…」

「あの時？もしかして、侵入事件のことですか？」

「え、ええ、そのことよ」

「はい、あの時は僕が魔法をドアに使いました。その…すみませんでした」遼一はそう言って頭を下げる。

「いや、別にいいのよ。犯人が分かったことだし…」涼子はそういいながらも顔が引きつっていた。

やばいな、どうやら相当まずかったらしいな…。

「遼一、手から魔法が出ることは誰にも言っではいけないぞ？わかったか？」

「は、はい。わかりました」

こうして、初の魔法の訓練は終わった。

夕食後、ベットに寝転がって遼一はこの世界について考えた

外に行ってみたいな。

遼一は外に一度も出たことがない。出る必要もなかったし、家はそれなりに広かったし本やインターネットなどもあり退屈しなかった。しかし、やっぱり外には行ってみたい。

そうだ！相談してみよう。とりあえず一緒に寝転がっている。母親の涼子に話す。

「お母様、相談したいことがあるのですが…」

「どうしたの？自分の部屋がほしい以外ならなんでも言ってみなさい」涼子は遼一を抱きしめながら言う。

部屋はまだダメなんかい！！と内心がくっとする。

「僕はお外の世界が見てみたいです」上目遣いでうるうると目に涙をためて言う。

「ッ！ダ、ダメよ。せ、せめて五歳からじゃないと」何故か鼻を押さえながら涼子は言う。

「…そんな、お母様なんとかならないのですか？」さらに攻撃を加える。

「うっ！…わ、わかったわお父様に相談してみましよう」

「ありがとうございます。お母様大々好きです♪」遼一は菜々子に抱きつく。

ふふふっ、完璧だ。全てシナリオ通り。…シナリオなんて作ってないけど。遼一は思う。

「ああ、最高だわ。私が一番遼一に愛されているわ♪」めっちゃくちやご機嫌になった。

「お、お母様！？いまなんと仰いましたか？」突然ドアが開いて、菜々子が入ってきた。

「あら、私は遼一から大好き、愛してると言葉をいただいただけよ

「？」

「愛しているは言っていないですよ？お母様」遼一が言う。

「お母様嘘はいけませんよ？」菜々子は怖い顔でいった。

「でも大好きってはいったわよ？」

「…本当なの？遼一？私はどうなの？」不安そうな顔で菜々子が言ってきた。

「もちろん、お姉さまのことも大々好きです♪」

「ふふふふっそうだったの遼一♪私も大好きよ？」そう言って遼一を恍惚な表情をしながら抱きしめてくる。

「…私はどうなんだ？遼一」いつの間にか祐一も入ってきていた。

「お父様も大々好きです♪」

「あゝそうかそうか、私もお前のこと大好きだぞ」そう言って祐一も抱きつく。

うゝむ、苦しいけど幸せいっぱいだしいいかなゝ遼一はそんなことを思いながらいつの間にか眠ってしまった。

次の日、遼一は朝起きたら家族みんな自分のベットに進入してきているという状況にはいい加減なれてきたが、すっかり昨日聞くのを忘れていたので改めて聞いてみることにした。

「お父様起きて下さい朝です」遼一は祐一を揺すって起こす。

「うむ：どうかしたのか？まだ朝の6時だぞ？」祐一は目を擦りながら言う。

「お父様、実は僕お外にでてみたいです」

「ああ、そのことか涼子から聞いているぞ、うむいいだろう、家族みんなで出かけるか！」そう言って遼一の頭撫でる。

「ありがとうございますお父様」

「男の子はやはり外に興味をもつな。だが外は悪い人たちがいっぱいいるからな」気をつけないといけないぞ？」

「わかっております。悪い人は僕がやっつけます」

半殺しかな？それとも炭火焼かな？どれにしようかな♪遼一は鼻歌をしながら思った。

「いや！遼一お前はまだ危ないからそんなことはするなよ？わかったな？」

なんだと！！それじゃ神の能力はつかえないのかよ：

「わかりました。では誰がやっつけるのですか？」

「それはもちろん私だ！遼一には指一本もふれさせん！いや、半径5キロに近づいただけで殺す！確実に息の根をつ！！」

いやいや、だめですよ半径5キロだなんて無差別すぎますよ！？

「んっ：あら？起きていたの？遼一それよりもあなたは どうしてそんなに暴れているのですか？」

「むっ実はなアレクスをに不穏に近づく半径5キロの奴をどうしようかと思ってな」いつになく真剣な表情で言う。

「あら、それなら簡単よ都市を焼き払えばいいのよ」涼子は笑顔で言う。

待て待て待て！ダメだろ！そんなことしちゃ無関係な人巻き込んだんじゃないよ！？遼一は慌てる。

「んゝっと。遼一おはよう：お父様、お母様どうかしたんですか？」菜々子が言う。

「菜々子！聞いてくれ遼一を狙う奴が都市中いや世界にたくさんいるかもしれないんだ」祐一が言う。

「それなら、世界中の都市を焼けばいいじゃないですか。簡単に解決ですけど：」菜々子が言う。

いやいやいや！違うでしょ！？本当にやらないよね？さすがにそこまでは：

「あゝ本当だ！簡単だなくならさつそくやるか。すまない一年までには遼一を狙うすべての生き物が消えて安全になるから、なんとか我慢してくれ」祐一が申し訳なさそうに言う。

「お、お父様！？さすがそこまでしないでいいですよ！？」遼一が言う。

とりあえず、チート家族だからなくでも普通の貴族と知名度はなぜかあんまり変わらないんだよね。でも襲ったらどうなるか分かったもんじゃないよ。遼一はそう思った。

「…遼一がそこまで言うならしかたない。今回は襲ってきたやつだけにするか」

「そうですわねゝ遼一が言うんですもの」

「心配しないで遼一お姉ちゃんが絶対守るから」

なんとも頼もしいもので…もういいか面倒だし。とりあえずいろいろと朝から疲れた遼一だった。

「ああ、そう言うことだよろしく頼む。…何！？そうか分かった。待っているよ」祐一は携帯の電話をしまった。

「あなたどうかしたのですか？」涼子が言う。

「ああ、護衛のことはすでに頼んでいたのだがまさかあいつまでくるとは…」

「あらあら、あの人まで来るんですね」涼子はくすくす笑いながら言う。

「その子供まで来るんだよ…あいつらしいけどな」

「昔を思い出しますね…」遠くを見つめながら涼子が言う。

「さっきから何を話しているんですか？お父様、お母様」遼一が言う。

「秘密の話ですか？」菜々子が言う。

「菜々子ちょっとここにきて…実はね」涼子が菜々子に耳打ちをする。

「ええっ！？それは本当ですか？…遼一大丈夫かな？」不安そうに遼一を見つめる。

えっ？姉さまが不安になるほどのこと！？一体何！？怖いよ！遼一の頭の中は恐怖に染まった。

「あら、もしかして嫉妬してるの？うふふまだまだ子供ね？菜々子は」涼子がこころ笑う。

「ち、違いますそんなことはありません！まだ遼一は三歳ですよ！

大丈夫大丈夫！」菜々子はぶつぶつと言っていた。

「おいそろそろ着くらしいから、準備しとけよ」祐一が言う。

「うふふ、楽しみですわね。遼一」涼子は遼一の手を引いて歩く。

「遼一お願いだから変なことにならないようにしてね？あなたはただでさえ可愛いからね？」もう片方の手を握って菜々子は言う。

「は、はい」めっちゃ凄いで言われたので遼一ビクリした。

とりあえず、何が起こるかわからないから気を引き締めないと！遼一は気合を入れた。

玄関を出るとびっくりした。空にたくさんの飛行機が空を飛んでいた。

「お、お父様あの空を飛んでいるものはなんですか？」

「ああ、そういえば遼一は初めて見たんだったな。あれは飛空艇ひくうていと言うんだ」

「飛空艇ですか：すごいですね」遼一は感動していた。写真でしか見たことがなかったため実物を見て嬉しかった。

「あなた、写真、写真！」涼子は祐一に言う。

パシャ、パシャと音が響く。

「す、すばらしい笑顔だ。これも我がコレクションに…」

「あなた！遼一の写真は私達で分け合うはずよ！これは遼一条例に引かかるわよ」

「そうです！共有の財産です！」

遼一条例ってどんな条例ですか！？ていうか写真は持っていたんですか！？いつから撮っていたんですか！？色々突っ込みたくなる遼一だった。

「おお、来たぞ」祐一が言う一台の黒いリムジン型の飛空艇が玄關の前で止まった。

運転席から執事が降りてきてドアを開ける。

「さあ、立花家の皆様、こちらにお乗りください」執事がそう言うのでみんな乗り込んだ。

中はありませんほど広かった。外見とは想像つかないほど広いのだ。ベットやソファ、キッチンなど普通に生活できる広さだった。

これも魔法の力なのか？と遼一は思いながら進む。

「やあ、久しぶりだね。こうして会うのは3年ぶりかな？」綺麗な青色の髪に緑色の瞳をしたイケメンさんがイスに座ってワインを嗜んでいた。

「ふん、まさかお前も来るとはな浩司」祐一は不機嫌に言う。

「あはは、つれないな昔はあんなに仲が良かったのに…なあ涼子」浩司と呼ばれた男が言う。

「まあ、いつものことよ。それよりもあなたの後ろにいるのが…あなたの子供？」涼子が言う。

「ああ、そうだ。…あいつが今居ないからきちんと育てないかね。美希、挨拶をして」

「は、初めまして…円城寺 美希です」ペコっと水色の髪で緑色の瞳をした可愛い少女が顔を出す。

「あらあら、初めまして、私は立花 涼子よ。さあ遼一も挨拶しなさい」

「初めまして、立花 遼一です」遼一はぺこっとお辞儀をした。

「よ、よろしくね遼一君」美希は手を差し出す。

「遼一でいいよ。美希ちゃん」そう言って手を握る。

「わ、私も美希でいいよ」顔を真っ赤にしながら美希が言う。

「初めまして、美希ちゃん、私は立花 菜々子よ。私のことは菜々

子かお姉ちゃんでもいいわよ？よろしくね」菜々子は屈みながら言う。

「よろしくお願いします。菜々子お姉ちゃん」ぺこっとお辞儀をする。

「…ほしい、ほしい！チョー可愛い！！」そう言って美希を抱きしめる。

「あひっ！ど、どうしたんですか？」少し目に涙をためながら美希は言う。

「はうっ！…これはいいよ！！もらっていいですか？」菜々子は浩司を見ながら言う。

「ごめんよ、菜々子ちゃんそれはできないよ。なんせ一国の姫だからね」

「…はい？」遼一は思わず声を出す。

「おや？聞いていないのかい遼一君は」浩司は苦笑いをする。

「僕はこの国の帝王、えんじょうじ円城寺 こうじ浩司だよ。まったく、涼子のいたずらかい？タチが悪いよ」

姫？帝王！？一番偉いじゃねえかよ！？何か家族みんなでこっち見てニヤニヤしてるよ…

「あの、その…し、失礼しました！！」とりあえず遼一は謝った。

「あははは、いいよ別に気にしてないよ。家族みたいなものだしね」

浩司は言う。

「いい表情がとれたぞ！これはいいぞ」

「ええ、コレクションに」

「やっぱり、最高よ！」

みんな今さっき撮った写真を眺めていた。：許さないかもね♪

「みんな、嫌い…大嫌い！」遼一は怒っている。

「ど、どうやら、年のせいで耳がな」

「へっ？い、今なんて言ったの？」

「も、もちろん大好きだよね！？」

めちやくちや不安な顔で見てくる。

「大嫌いっていったんだよ？反省してね？ねえ美希、一緒に向こうで遊ぼうか」遼一は美希の手を引く。

「ああ、遊ぶのであれば向こうの部屋を使うといいよ」浩司が言う。

「ありがとうございます。それでは失礼します浩司さん」

「ああ、また後でな…くっくくくっ！」我慢しきれず笑った感じだった。

「：お父様、お母様、お姉さましつかりと反省してくださいね？」
そう言って遼一は美希を連れて部屋に入った。

ドアの向こうからこの世の終わりのような叫び声と静かな笑い声が

聞こえてきた。

しばらくして、ドアの前で懇願するような真似をしだしたので、さすがにやりすぎたかなーと思ったので自分の部屋をくれるという交換条件で許した。

ふふふっ、最高だ！交換条件いいぞ！！やば過ぎる！！これで自分だけの空間ができるんなことが！！！！遼一は黒い笑みを浮かべていた。

「…遼一？…大丈夫？」美紀が心配そうな目でこちらを見ていた。

「ああ、大丈夫だよ」遼一は何もなかったように振舞った。

「そういえば、浩司さんどうして帝王なんてあるんですか？公に出さなければ意味がないような…」

「ああ、そのことかい僕の仕事は主に裏側なんだよ。わかるかい？」

「裏側ですか…やっぱり確執てきなものがあるんですか？」

「ほおゝ感心するねゝ三歳の子供がこんなことまで知っているなんて…」にやにやししながら遼一を見る。

「ふん、遼一は天才なんだ！お前みたいな邪な奴にはやらんぞ！」
祐一が怒りながら言う。

「あはは、そんな僕がとって食おうなんてする奴に見えるかい？」

「「見えるぞ（ますね）！」」祐一と涼子の声が被った。

「ひどいなく昔からの仲じゃないか」浩司は笑いながら言う。

「昔からの仲だから言えるんだ！」

そんなことを言いながら三人はどこか楽しそうだった。

「仲がいいみたいだね」

「そうね。私と遼一の仲みたいに♪」菜々子はそう言って遼一に抱きつく。

「あっ！」美希はそんな様子をみて悲しそうな表情を浮かべていた。

「うむ、着いたぞ今回の目的地の中心街、渋谷だ」

電子版や空中ディスプレイ、空中に浮いている車など科学が溢れていた。人もたくさんいて若者がたくさんいる。

：いや、渋谷か：やっぱり日本語なんだね！ニューヨークとかじゃないんだなと遼一は思った。

現代の服装とあまり変わりがない。

遼一達はスーツや着ている服などは高級感が溢れている。

「さて、お買い物と行こうか。それとも色々なところ回るかい？」

「僕はいろんなところを周ってみたいです」

「私も！」

「そうかいわかったよそれじゃあいこうか」そう言って浩司は歩き出した。

「そういえば護衛は：大丈夫なんですか？」

「護衛？これほど頼もしい護衛がどこにいるんだい」浩司がそう言いながらみんなを見る。

「はあ？お前は守らん。私を守るのはお前以外だ！」

「ふふっ私も菜々子と遼一と美希ちゃんだけ守るわ」

「私も遼一と美希ちゃんだけ」

「：なんかそういうことになっていますが」

「つれないね！親友を見殺しにする気かい？」

「ああ、遠慮なく見殺しにするが？てかお前に護衛なんていらねえ

だろ!!」

「用心に越したことはないよ」

「相変わらずだなお前…」祐一はジト目で浩司を見る。

「ありがとう。お褒めの言葉として受け取るよ」にやにやしながら言う。

「ふん！」

一体どのくらい強いんだろう浩司さん。まさかお父様とお母様と同じくらい?…まさかね。チートはないよね? 遼一は少なからず不安を覚えた。

店をまわっていて思ったことが地球にいた頃とあんまり大差がないということだろうか。貴族は確かにいたが特別視されることもない。ただ金持ちと言うことくらいだろうか? 貴族は自分のお金で貴族になったという人、または国が認めたという人だ。この人たちは政治的発言権がある。特権としてはそれくらいだろうか? 僕は権力には興味がないからなく遼一はそんなことを思いながらみんなでお店を一緒にぶらぶら歩いていた。

「おい!! ここにいる全員床に伏せろ!!」全身黒ずくめの奴らが六人くらい銃をもって現れた。

「おい！そこにつただているお前らもだ抵抗するとだたじゃおかないぞ！！」

「浩司、あいつら殺していいか？子供達が危ない」

「できれば穏便に済ませてほしいのだが…」浩司が困り顔で言う。

「却下だ！！消えろ！」祐一はそう言って軽く手を振る。

「ごわっ！！」

「へぶっ！！」

「ぶしっ」

「ぎゃっ！」

「がっ！」

「げうっ！」

六人が一斉に吹っ飛んだそのまま20メートルくらい水平に飛んでいって壁を貫通していった。

会場が静まり返った。そしてワァー！！！！と盛り上がる。

「ああ、つまんね帰るか」祐一はそう言って浩司を置いて帰ろうとする。

「警察に行って事情聴取かな。また権力を使わないといけないのか…」浩司は苦笑いした。

「そうか、まあ頑張れ」祐一はそう言って浩司の肩に手を置いてぐっと親指を立てた。

「何グットサインしているんだい？無論き・み・も例外ではないよ？」浩司は笑顔で答える。

紺色の制服をきている男がこちらに走ってきた。

「あのすみません事情聴取と言うことで署に来て貰ってよろしいですか？」警官らしき男が言う。

「よろしくない！だから帰るぞ！」そう言って帰ろうとするが浩司に襟を掴まれる。

「無理だよ大人しく行こう。じゃあ後で家に寄るから涼子、美希をよろしくね」

「わかったわ」

「ふふふ、いい子にしているんだよ」浩司はそう言って美希の頭を撫でる。

「お父様、どこに行くのですか？」不安な表情を浮かべる。

「大丈夫、すぐ帰ってくるから。それまで遼一君に遊んで貰いなさい」そう言って浩司は遼一を見て軽くウィンクをする。

子守は僕のわけですね…いいですよ別に遼一はそっぽを向いた。

「それじゃ行ってくるね」

「た、助けてくれー！！涼子！菜々子！遼一ー！！！」

とりあえず手を振ってあげた。こういうの大事だよね。遼一はにやにやしながら見届けた。

家に帰ると遼一は菜々子と美希と一緒に遊んだ。

「そういえば、お姉様来年になったら学園ですよね？」

「…行きたくない私は遼一と一緒にいる」菜々子はそう言って遼一に抱きつく。

美希の行く小学校は全寮制である。なので長期休みの時にしか家に帰って来れない。

「お姉さまこれは仕方ありませんよ義務なんですから」

「それでも嫌だ!!」目に涙を溜めながら言う。

うゝむ言うタイミング間違えたかな。遼一はちよつと傷心した。

「大丈夫ですよ。もしかしたらお姉さまが優秀だったらすぐに卒業というのもありえますよ」

超がつくほど例外中の例外だけだな

「本当！？そしたら私頑張っちゃうよ」そう言って部屋を出て行った。

あゝたぶんデータバンクの端末もらうんだろうな。遼一はそんな姉の行動に苦笑いした。

「遼一、学園って私もいけるの？」美希は目をキラキラさせながら遼一を見ってくる。

遼一は不覚にもその仕草がかわいいっと思ってしまった。

「ああ、7歳になったら僕達も行けるよ」

「そ、そうなんだ。行けるんだ」美希は遼一に笑顔を向ける。

遼一は思わず美希を抱きしめた。

「えっ？遼一？」顔を赤くしながら言う。

「あっ！ごめんごめん可愛いものでついっい」そう言って美希を放す。

「あっ…」名残惜しそうな顔をしていた。

「ただいま。これで私も…どうかしたの？」菜々子は怪訝な表情で二人を見る。

「「なんでもないです」」二人は同時に言った。

「…ふくん、そう、でさ遼一これどうやって使うの？」

「ああ、これはですね」

「これ何？」

三人でわいわいしながら時間を過ごした。

夜になると美希のお迎えが来た。その飛空艇に乗っていた祐一はぐったりした表情で現れた。

「やあ、お世話になったね」祐一の後ろから浩司が何食わぬ表情で現れた。

「いいえ、手間は全然かからなかったわよ？」

「そうかい、ありがとう。さあ行こうか美希」

「…はい」俯きながら浩司の元にいく。

「おや？どうやら帰りたくないみたいだね？」

「はい」上目遣いで浩司を見る。

「ふふふっ大丈夫だよ明日も遼一君は遊んでくれるよ」

「明日もここに来ていいんですか!？」 美希は遼一を見る。

「美希が来たいならきていいよ」

「わかった! また明日も来るね!」

「ああ、待っているよ」

「じゃあまたねー遼一君! 菜々子お姉ちゃん!」

そう言いながら飛空艇に乗って帰っていった。

「どうやら美希とはライバルになりそうね」

「お姉さま? 何のことですか?」

ライバル? 勉強のことか? 魔法は…いや美希はチートではないはずだ!!

「ふふふっ菜々子、自重はしなさいね?」 涼子は微笑みながら言う。

「菜々子の気持ちは分かるぞ」 祐一も頷きながら言う。

一体なんなんだ? 遼一はそう思いながら一日が終わりを告げた。

2話 三歳だよ！魔法を教えてよ！そして外にも……！！（後書き）

飛空艇ってFFか！って言いたくなりますよね。

3話 とりあえず説明よろしくな!!

やあ！立花 遼一だよ！四歳なったよ。お陰様でね。今日はお姉さまの学園へのお見送りだよ。

「りよーちゃん！やっぱり私は離れたくないよ！！」そう言いながら菜々子は遼一に抱きつく。

「お、お姉さま、く、苦しいです！」遼一はじたばた暴れる。

「りよーちゃん！ななちゃんって呼んでって言ったでしょ？」

いつからだ：りよーちゃんって呼ぶようになったのは、確か：初めて外に出かけた時だったっけ？まあ、いいか。

「お姉さましっかりしてください。それでは学園の皆様にあいわれてしまいますよ？」

「別にりよーちゃんがいればどうでもいいし」そういつてそっぽを向く。

「そう言っていたら好きな人できませんよ？」

「りよーちゃんが好きだからいいもん」

ああーまだ恋はわからないのか：それもそうか友達、美希しかいないもん。

「りよーちゃんその：毎日TV電話していい？」

「ええ、それはかまいませんが…ほどほどにしてくださいよ？」

「うん、わかった。一日12回にするよ…」落ち込みながら言う。

「え！？12回ですか！？せ、せめて3回じゃないですか！？」

「そ、そんな！？一日24時間だから一時間に一回だよ！？それなのに…さ、3回だけ？たった3回！？横暴だよ！」遼一の胸倉を

つかみながら言う。

「まあ、そうですが…」

「ねえ、わ、私どうやって生きていけばいいの？し、死ぬしかないの？」涙目で菜々子は言う。

「いやいや！反則だよその涙目は…これはどんな男でもイチコロだよ！罪深い女だね！お姉さまは」

「お姉さま…私は離れていてもお姉様のことは忘れたりしませんよ？確かに寂しいですが3回でも姉弟の絆は確かめられますよ？」

遼一は慰めるように言う。

「そ、そうだね！そんな簡単に絆は壊れないよね！りよーちゃん
の言うとおりでよ！」そう言ってまた抱きついてくる。

愛？姉弟愛か…素晴らしいね。

「ほら、菜々子そろそろ行くよ」祐一がそう言って飛空艇のドアを

開ける。

「うん、行ってきます」少し俯きながら言う。

「菜々子、ほらしっかりして、遼一が見てるわよ？」涼子が言う。

「うん！お母さん、りょーちゃん行ってきます！」

「いってらっしゃいお姉様」

「いってらっしゃい元気でやるのよ？」

「わかりました！それじゃあねー！」菜々子を乗せた飛空艇がゆっくりと上昇して空へ飛びだった。

あーやっと思ったよお姉様…しかし1日3回か多いな…恋人か…！
って言いたくなるよ。

自分の部屋に戻り早速パソコンに向かう。自分の部屋が置かれてから無闇に両親はやってこなくなった…お母様は寝るときくるけど反抗期だからって話していたけど…絶対違うからな！

あー最高だね。こうやって毎日パソコンにどっぷり浸かれる日が来るなんて…！感無量だよ！ここ最近、美希やお姉さまと遊んでい

たがな…結婚ごっこだっけ？二人ともお嫁さんだなんてどんな修羅場ですか！？って感じだったよ。もうあれはやりたくないよ。美希は多分もう菜々子がいらないから来ないだろうな。あゝ至福ってこういうのを言うのかなゝ

ほくほく顔でパソコンと向き合いながら思う遼一だった。

さてと、アニメもいいけど…今は帝王のことについて調べよう。この日のために色々準備してきたし。

遼一はそう言ってパソコンのプログラムをだす。

さて、日本政府にハッキング仕掛けますかねゝ遼一は早速、プログラムを使ってハッキングを仕掛ける。

おうおうおうおう！！さすがだぜ！半年かけて作ったかいがあったよ！スイスイ行くよ。

遼一は膨大な量の情報を一気にコピーしていく。

よしよし！バレてない！はははは！！ちよろいぜ日本政府！僕の実力の前じゃ鉄くず同然だね！

しかし、ある一定のところに差し掛かったところでエラーが発生する。

なんだ！？どういうことだ！え？マズイ！逆探知される前――！

「おや？誰かと思ったら君は祐一のところの遼一君じゃないか」

「…どうもご無沙汰しております」

なく！！浩司さん！？あんた何者！？普通逆探知できないよ！？

「あはは、ひさしぶりだね。一年ぶりくらいかい？いつも娘がお世話になっているね」

「え、あ、はいこちらこそ…いつもお世話になっております」

「うんうん仲が良くていいことだ。…さて今回のことについてだが…君は天才かい？」浩司はにやにやしながら言う。

「て、天才では、あ、ありません！ぼ、凡人です」

「いや、祐一と涼子の子供だから凡人はないよ。話は戻すけど何でハッキングなんかをしたんだい？」

「その…浩司さんの素性がしりたくて…」

「僕の素性？帝王だけど？」

「そ、そういうことではなくてですね。その…色々な繋がりとか」

「ああ、そういうことね。でも残念、君には教えられないよ。さて僕に言うことがあるんじゃない？」

「ごめんなさい勝手に調べようとして」遼一は俯きながら言う。

「ふふふっ好奇心が有ることはいいことだが過ぎたことをしちゃい

けないな」にこにこしながら言う。

「えっとその罰則とかは…」不安な色を遼一は浮かべる。

「ん？ああ、子供はないんだよ。14歳から少年法に引っ掛かるけど…きみはまだ4歳だしね…」

良かったやっぱり法律通りなのか。心配して損したよ。あゝこれからハッキングし放題！！遼一のテンションは最高潮を迎えていた。

「ん、反省してないようだから、罰をあげるよ。いや寧ろご褒美かな？」浩司がにやにやしながら言う。

遼一は背中にいやゝな汗を流した。

「毎日、美希と遊んでやって欲しい。あの子は一人でいることが多いからね」

浩司さゝさゝん！！！？？？あなたは！あなたって人は！！遼一は涙を流した。

「おやおや、そんなに嬉しかったのかい？これは罰じゃなくてご褒美だったかな？」意地悪な笑みを浮かべていう。

あははは！！盛大に勘違いしていらっしゃるよ！！あゝ溜めていたゲーム、アニメ、小説が…！！

「それじゃ、明日から美希を送るね遼一君のお母さんにもよろしく」

そう言って電話がきれた。

自由それは自分だけの時間、自由それは至福、自由それは…儂い！
遼一の自由というものはハッキングを行なったせいで消えた。浩司
のことについては二度と調べないことを遼一は誓った。

次の日、ピンポーンと景気のいい音とともに美希が現れた。

「りょーちゃん遊びに来たよ」満面の笑みで言ってきた。

そう言えば、美希もりょーちゃんだったな…それにしても笑顔眩し
いよ。子供の無邪気な笑顔眩しすぎるよ！！…僕も子供だけどな
！どす黒いんだよ！引いちゃうくらいな！

「うん、待っていたよ。さあ、中に入って」遼一も笑顔で答える。
どうだ！この営業スマイル！完璧だろ！俳優になれ…ませんよね。

すいません調子に乗りました。

「りょーちゃん手つないでもいい？」 純粹無垢な笑顔で言うてくる。

「いいよ」 遼一はそう言って手を繋ぐ。

「ふふふっ」 ものすごく嬉しそうな表情を浮かべる。

子供っていいな。純粹無垢でさ。汚れを知らなくてさ。え？ 僕？ ドロドロに汚れてますけど何か？

「あらあら、二人とも手を繋いじゃってゝまるで恋人みたいね？ でも遼一はいくら美希ちゃんでもあげないわよ？」 涼子が微笑み

ながら言うてくる。

あんた子供に対してなんてこと言ってるんだ！？ 大人でしょ！？ 自重しなさい自重を！

「私はクッキーを焼いてくるわ。だから二人はお部屋で遊んでいらっしやい。でもイチャイチャしちゃうダメよ？」 目で牽制をしてく

る。

「はい、わかりました」

「はい」

いや、お母様。4歳ですよ？

そういえば家にはメイドさんや執事さん居ないんだよな。メイドさ

ん生で見たかった。

「りょーちゃんどうしたのぼーっとして」首をかしげながら言う。

「なあ、メイドさんって美希の家にいるか？」

「え？居るけど…それがどうしたの？」

イエス！キタツ！これキタよマジで！！はははは！行くしかない！
もうこれは行くしかない！！

「僕、いつも美希を送っている執事さんは見てるけど…メイドさんは見たことがないんだ。だから、見てみたいな〜って思ってる」

「え？そうなの？だったら明日、家に遊びにきてよ！メイドさんたくさんいるからさ！」目を輝かせながら言う。

ごめんよ美希…純粋な目で見るんじゃないんだ。君とは違う汚らしい目で見えるんだ…本当に申し訳ない！遼一は心の中で謝った。

「ありがとう！じゃあ、お母さんが来たら相談してみるね！」

「うん！」笑顔で頷いた。

あゝ、罪悪感たっぷり…もう子供利用したくないよ。

しばらく結婚式ごっこと言う黒の歴史に残るような恥ずかしいことをしたあと涼子がクッキーを持って入ってきた。

「あらあら、それは結婚式ごっこかしら？ 遼一キスはしたの？」 微笑みながら言ってくる。

目が笑っていませんよ？ 何気に殺気出さないでください！！

「してませんよ」

「りょーちゃんがなぜかしたがないんです」 頬を膨らませながら言う。

「あら？ 遼一は菜々子ちゃんのこと嫌いな？ …それはそれでいいような」

最後なんて言いました？

「そういうことはありませんが…そういうのは大人になってからと思います」

ファーストはとっておくべきだ！ 毎日取られないように修羅場をくぐり抜けてきたんだ！ こんなところでめげないよ。

「そうなの…じゃあ私にはしてくれる？」 目を輝かせながら言う。

「イヤです」

「ううっ！ 遼一はそんなに私のことが…！」 涼子は涙を流す。

「いえ、そうではありません。軽率な行動はいけないことかと…」

「なら頬にキスは？ 他国では友好のあらわれよ？ これならいいと思うわよ？」

「確かに…お母様の言うとおり一理ありますね。他国では普通によつてますし」

「ええ、だからこの国も唇にキスは友好のあらわれと同じよ？」 恍惚とした表情で言ってくる。

うむうむ、それなら納得…できるか！！ ふざけるなこれで丸め込めるなんて思ったら大間違いだ！！

「…それは間違っています！ 僕はこれで失礼します！」 遼一は【速度操作】を使って自分の身体を強化してダッシュでこの場を離れた。

た。

「まさか、こんなところで【速度操作】が役に立つとは…役に立つ？ なんか忘れていような…まあ、いいか」

遼一は後々思いっきり後悔することになる。

夕方になると、とりあえず落ち着いただろうとういうことで戻ったら美希は帰っていた。

涼子に聞くと泣きながら帰ったらしい。流石にものすごく申し訳なくなっただけで電話をしようと思ったなら電話がかかってきた。

電話先は浩司さんだったので普通に出了た。

「やあ、遼一君。今日は美希があお世話になったよ」画面越しで笑顔で言う。

ん？なんか目が笑っていないような…いや、気のせいだろう。

「あ、はい」

「それで聞きたいことがあるんだけど…なんで美希を泣かせたんだい？」やはり目が笑っていないかった。

怖っ!! やばい! 怒らせたよ! どうしよう…誤魔化すしかない!

「すみません! 多分それは途中で僕が抜け出した為なんです!」そう言って頭を下げる。

「ふうん? なんでまたそんなことを?」

「結婚ごっこをしてまして途中で恥ずかしくなって逃げたんです」

「あゝなるほど、そんな理由があったのか。…それは災難だったね」何故か遠い目をして言う。

ん? トラウマでもあるのかな? …あまり深く聞かない方がいいな。まあ誤魔化せてなによりだ。

「だから、キスしてくれなかったって泣いていたんだ納得したよ」うんうんと頷く。

あゝなるほど、知ってたんだ理解したよ。…はあゝ

「今回は君が悪くないということがわかったよ。よかったね」にこにこしながら言う。

「はい? どういう意味ですか?」

「ん? 君が好きなことはなんだい?」

「へ? えっと…ゆっくり過ぎすことですかね。アニメとそういうのを見て」唐突な質問に少し驚きながら答えた。

「それなら、もし美希を泣かせたら、君の平穩がなくなるってことだよ」笑顔でさらっと言う。

はい？　どういうこと？　…冗談だろ！？　な、泣かせたら平穩が……！！！！

「ふふふっそういうこと、理解してくれたかな？　…まあ、これから美希をよろしくね？」

「いえっさ〜」

「あれ？　聞こえないな〜これは今すぐに——」

「了解しました！　謹んで美希様のお相手を務めさせていただきます！！」敬礼をしながら言う。

「よし！　それでいいよ。それじゃあ、明日は家に来るんだろう？　よろしくね？」　そう言って電話がきれた。

あはは、災難だ。これなんとかできないかな？　四歳児を脅迫ってなんなんだよ！！　ああ！　そうだ！　記憶操作！！　こんな時のために神

の能力があるんだよ

早速…あれ？　何で？　何でも出来るんじゃないの！？　はあ！？　あの口り神！！　何が何でも出来るだよ！！

ピリリリリッ端末の音が響く。

「あ？」そう言って端末を見る。

「神様」

端末にはそう書いてあった。

「やア、神様よオ」

「なんだい？その話し方？気でも狂ったのかい？」

「あア！？てめエ、何でも出来るんじゃないのかよオ！！」

「あれ？そんなはずはないよ。魔法は何でも出来るはずだよ？」

「はあ？今、魔法は何でも出来るって言ったか？ロリ神？」

.....

「え？うん、最初にも言ったよね？ここの世界の魔法は神の能力で何でも出来るって」

「おい：創造魔法みたいな奴じゃねえのかよ？」

「え？違うけど、私の神の能力で魔法の効果範囲、威力の上限なくしたはずだけど…」

「…記憶操作とかできないのか？」

「おいおい、魔法はそこまで万能じゃないよ。勉強したのかい？まあ、開発するのは別だけど」

「…俺は勘違いをしていたのか？それともお前の言葉が足りなかった

たのか?...どっちだ？」

「...いや、たった今思い返してみれば私が言葉足らずだったかもしれない...」

「だったら、今から何でもできるようにしてくれ！いや、記憶操作だけでもいいからくれ！ロリ神！！」

「イヤだ」

「はあ！？てめえのミスだろ！？ガキみたいにすねてんじゃねえぞ！？」

「ロリじゃないもん」頬を膨らませながら言う。

「あ？じゃあ神様お願いしますとでもいったらしてくれるのか？」

「うーんそうだね！土下座で心を込めてゝさあ、どうぞ！」

「どうか、神様！その素晴らしい能力で僕を助けてくださいお願いします！」誠心誠意の土下座をした。

怒るな僕...これも平穩のため、静かに過ごすため！ここで、ここで我慢をすれば...！！

「イヤだ」

「ロリ神ゴラァァァ！！！！」

キレていいよな！？これは理不尽すぎるよな！！

「てめっ！ふざけるな〜！！やって良いことと悪いことあんだろ
うがよ〜！！」

「いや〜楽しくってつい？よくあるでしょ？」

「あ？何お前エ？殺されてエの？」

「無理だよ〜遼一じゃあ私を殺せないよ〜残念でした〜」人を馬鹿
にしたように言ってくる。

やべェ本気で殺意が芽生えたわクロス：無理だけどな〜！！ちきし
う！！

「あ！それと君にあげた能力役に立っただろう？」

「あ？ああ、あれな確かにあの時は役に立った…いや立ってない」

「あれあれ？役にたったよね〜？」

「たってねえよ」

「ふふふっじゃあこれは何かな？」神は一通のメールを送ってきた。
遼一はメールについていたファイルを開いた。

『まさか、こんなところで【速度操作】が役に立つとは…役に立つ
？なんか忘れていたような…まあ、いいか』しっかり録音されて
いた。

「…これは僕じゃない。お前が作った合成だ！お前の神の能力ならどうとでもなるだろう？」

ははは！無駄だ！貴様が証拠をとっていたとしても神の能力があるせいで証拠の信用せいがガクつと落ちたな。

「あれあれ？せっかく私が脅さないで言ってあげてるのに残念だな〜それなら君の平穩を——」

「申し訳ありませんでした！私はしっかりとあのようなことを言っただことを認めます！」遼一は画面に向かって土下座をする。

「そうそう、それでいいんだよ！私も無闇やたらに遼一を脅したりしないからさ次からは正直に答えようね？」

「りょーかいしました」

「じゃあ楽しみにしててね？うふふふふ♪」そう言って電話がきれた。

最後は力か…弱いな僕…

遼一は己の無力さを知った。

次の日、今日は美希の家に行くんだが…迎え来るらしいな。あのリムジン型の飛空艇で…

とりあえず10時に来るって話だ。まあゆっくり待つか。

ピリリリッ

「お姉様」と言う文字が浮かんでいた。

「おはようございます。おね——」

「あーりょー君！！会いたかったよーダメだ！生のりょー君が見たいよTV電話じゃりょー君の良さが十二分に発揮されてないよー」。

今から学校抜け出していいかな？大丈夫かな？いいよね？普通に許されるよね？ふふふっ絆^{あい}を確かめ合うのはなんかいいよね？この想いはと・め・ら・れ・な・い・んだよ！キャー言っちゃたよ！りょーちゃんに告白しちゃったよ！！これで私とりょーちゃんは結ばれる運命だったって証明できたね！幸せだよ！幸せすぎるよ！ここまでの道のりは長かったよ。でも大丈夫！何があってもりょーちゃん
は私が絶対に守るからね！！それからね——

しばらくお待ちください

30分後

——というわけなんだよ。聞いてる？りよーちゃん」

「ええ、聞いてますが…長すぎますよ。こんなに長かったら電話に出ませんよ?」

長いんだよ!とりあえず聞いてないからね?ダミーを起動してそこにいるように見せかけて、30分間暇だったから小説読んでましたかなにか?

「そ、そそそ、そんな!?!それは嫌だよ!!絶対に!!」目を血走らせながら言う。

「そしたら自重してください。一回につき5分、そうしないと一回に減らしますからね」

「わ、わかったよ…でもその時はいっぱい話してね」

「もちろんですよ。きちんとお相手を務めさせていただきます」

「ありがとう!あっ!それと最近お母さん達何かしてきていない?」

「はい?いえ、最近は無駄話もなくなったし、そういうばこっちら話しかけることが多くなりましたね」

「うんうん、ちゃんと条例守っているんだ」

「はい？なんていいました？」

「な、何でもないよ！？これで今日も一日頑張れるよ！それじゃあね！」

「はい、頑張ってください」そう言っで電話をきった。

「遼一、お迎えがきたわよ」一階から声が聞こえる。

「あ、はい！今行きます」

「遼一、…イチャイチャしちゃダメよ？」

「しませんよ！」

なんでいつもこうなんだろ…遼一はため息をつきながらリムジン型の飛空艇に乗り込んだ。

「つきましたよ？」執事さんがそう言っで声をかけてくる。

30分くらいかな？結構遠いな…そう思いながら、リムジン型の飛空艇から降りて玄関に向かうが…

「でかつ！」

そこには宮殿が建っていた。周りは森に囲まれて上手くカモフラージュされている感じだった。

帝王となるとこうも違うんだな：でも何で公には明かされていないんだろう？ いや深く関わったら平穩が…！

「さあ、こちらです。どうぞ中へ」そう言って執事さんはドアを開ける。

「「いらっしやいませ、ご主人様」」そう言って総勢20人のメイドさん達が一斉に頭を下げる。

「え？ は？ あ、はい」

あゝヤバイこれは慌てるよ。だって20人が一斉に頭をさげてくるんだよ？

「りょーちゃんいらっしやい！」

「え？ あ、うん。今日はドレスなんだね？」

美希は白のドレスに身を包まれていた。肩口は素肌が見えていて子供が大人の女性になるためちよっと背伸びをした感じだった。

「えへへ、どうかな？」

「うん、似合っているよ」

「ありがとう！」頬を赤に染めながら言う。

うむうむ、照れてるね。子供はやっぱいいよ。…それにしてもメイドさんたちみんな美人さんだな。

遼一はメイドさんたちを見る。みんな藍色の服に白のフリルのついたエプロンをつけていた。まあ、言い換えるとイメージ通りのメイド！って奴である。

「初めて見たんでしょ？メイドさん」

「うん！初めて見たよ！なんかすごいねメイドさん！」

いろんな意味でね！特に容姿とか、とある一部分とか！

「じゃあ早速だけど、お家で遊ぼう！」美希はそう言って遼一の腕を引っ張る。

「え？あれ？ちょっと！？」そのまま遼一は引きずられて行った。

メイドさんとのお話は？ないの！？いや…もういいや、面倒だ。

遼一は色々と諦めた。

「それで？何して遊ぶの？」

「結婚ごっこ！」目をキラキラさせながら言ってくる。

「いや…あのね、それは僕あまりやりたくないかな〜っと思って――いや！嘘です！嘘です！！お願いだから泣かないでね？」

ものすごく目を潤わせて上目遣いで見てくるので遼一は撤回した。

「それじゃあ、私がお嫁さん役ね？」

「りょーかいしました」

「うん！それでね…キスして欲しいな」上目遣いで見てくる。

やはりそう来るか！よし…！

「…ごめんね今はできないよ」

「え！？何で？どうして？」そう言っただけ泣きそうになる。

「もし将来、僕たちが結婚式を挙げるものがあつたらその時にしよう」

「将来？私たち結婚するの？」

「さあ？それはまだわからないよ」

「でも、私はりょーちゃんがいい！」

「ありがとう。でもまだ時間はあるんだゆっくり考えようよ」遼一

はそう言って美希の頭を撫でる。

「うん」そう言って目を細めながら受け入れた。

いやゝこのセリフがダメだったらほかの20通りのパターンを繰り出さないといけなかったよ。お陰様で不眠不休なんですよ！子供

には正直きついです。…ねむい

一方部屋の外では…

「どうやら失敗してしまったようです」

「ありゃ？ウェディングドレスに似せたけど失敗かな？」

「親ばか全開ですね」

「そうだね…美希に色気はまだ早かったかな？」

「まだ四歳ですからね…」

「メイド長の君から何かアドバイスはないかい？」

「そうですね…しばらく様子見の方がいいと思いますよ？」

「美鈴^{みすず}がいたらもう少し違ったかな？」

「あと一年したら帰ってきますよ」

「それまで待つか」

「そのほうがいいと思います」

こうして一日が過ぎていった。

4話 魔法について詳しく知ろうかな〜と（前書き）

魔法の設定に時間が掛かりました。

4話 魔法について詳しく知ろうかな〜と

やあ！立花 遼一だよ。とりあえず5歳になったことをお伝えするよ。いや〜一年経つの早いね〜。え？些か時間、飛びすぎじゃないかって？特に変わった様子がなかったから飛ばしたんだよ！お姉様は一年生の間で義務教育に必要な学習を終わらせるって言って去年は一度も家に帰って来なかったし…でもすごいね小学一年生で約9年分の勉強を覚えるんだよ？努力家だよな。そして今僕が何をしているかって？今は魔法の練習中だよ。

魔法を使うには魔粒子というものを媒介する。魔粒子の存在は科学的には証明されているが、魔粒子は今だ解明されていない。

魔粒子は絶対量が決まっている。つまり、魔法を使うと魔粒子が一時的に減るのだ。しかし、魔法を放つと数が元に戻る。この減ったり元の数に戻ったりする時に感じる魔粒子の波長を【魔力】と言う。魔粒子が不足しているところを補おうとする。そうすると全体的な魔粒子が薄まる。そうしたら、複数の人が近くの場所で同時に使うと魔粒子の量が足りなくて一人が魔法が発動しなかったり、威力が弱いなどといったことになる。複数と言っても何千人と言った人々が同時に使うといったことがない限りそんなことにはならない。それと魔粒子を操れる量は個人差がある。この魔粒子の操れる量のことを【魔力量】と言う。魔力量は魔法を使うたびに減るが、休んだり、回復用のアイテムを使えば元に戻る。魔粒子を絶対に操ることができないということではなく、個人差はあるが練習をすれば誰でも魔法を使える。

魔粒子は肉眼で確認することができなく、大型な機械を使ってやると見ることができる。魔粒子は物を媒介にしないと扱うことができない。この物のことを魔具（magical weapon）通称 M^マW^ウという。

MWは今のところ二つの種類に分けられている。E系統とB（実弾）系統だ。^{エネルギー}

分類的には第一世代がB系統で第二世代がE系統だ。B系統は銃は実弾、剣は鉄などといった金属系の物を使うのに対し、E系統はエネルギー刃を使った剣、エネルギー弾を使う銃といったエネルギー系を使う。今では第二世代を使うのが主流となっている。

魔法を使うとその魔粒子が作用して、火、水、風、雷の基本の四つの元素を出す。これをMWを使って、身体強化やバリア、治癒などといったものに応用、変化させることができる。しかし、人間を操ったり、心を壊したりなど精神系の魔法は発見されていない。

それと魔法を使うときはイメージを大抵使う。しかし、魔法の仕組みや構造などといった魔法理論を習得していればより効率に働くことが証明されているが、今だ魔法については研究中なのでもっと効率のいい方法があるかもしれないというのが現状だ。人にも得意な魔法と不得意な魔法と言うものがある。ある人は、一つのものに特化したり、ある人は全てを一通り使えるようにしたりなど様々な人々がいる。だが、世の中には例外というものが存在する。

遼一は中庭に立っていて色々な魔法を試していた。

遼一片手を前に出す。

「水」一言軽く言うと、直径5 m位の水の塊が現れた。

「蒸発」そう言うのと煙を出しながら水はすぐに消えた。

MWなしで出来るのは知っていたけど…。なぜか魔粒子を使ってないし…しかもイメージだけでも問題ないし。不得意な魔法もないし…あれ？僕って人外かな？…今更か。

遼一は感覚で魔粒子を使っていないことを理解した。

「あら？こんなところで何をしてるの？」

「あ、お母様、ちょうど今、魔法の練習をしていたのです」

「魔法の練習？でも、魔力を感じなかったけど…」

「はい、そうです。それでお母様、あの…魔法を使うのには魔粒子を使いますよね？」

「ええ、それは、もちろんそうよ。でもそれがどうかしたの？」

「あの、僕…魔粒子を使ってません」

「…やっぱりそうだったのね」

「やっぱりとは？」

「あなたに初めて魔法を教えたとき、魔粒子を感じなかったから…」

「えっと、初めてというのは二歳の時ですか？」

「二歳？確か三歳の時のはずよ？」

「あっ、いえ、そうですね三歳ですよ」慌てて言い直す。

「何か隠してるの？」少し怖い顔で言う。

「あ、いえ、その…」

「正直に話して」遼一の方に両手を置きながら優しく微笑む。

だ、ダメだこれは多分怒ってる。はぁ、仕方ない正直に話すか…。

遼一は正直に自分が昔ドアに魔法をかけたことを話した。

あの時は多分微力ながら魔粒子を使っていたと遼一は推測する。そのため涼子に気づかれたと思った。

「遼一が犯人だったんだね？なんで早く言わなかったのよ」少し怒りながら言う。

「も、申し訳ございませんでした」

「はぁ、もういいわ。でも罰として今日は一緒にお風呂にはいりましょうね♪」満面の笑みで言う。

「わ、わかりました」がくっとしながら言う。

なんでお風呂なんだよ…でも嫌だなく。一緒に入ると何故か寒気がするし。

「あ！そうそう、魔粒子を使えることは他の人たちには言わないでね？」

「それはもちろん分かっています」

「それならいいけど、それと無闇に魔法を見せないように、破ったら…そうね、ずっとお風呂に一緒に入るってどう？」

「他人に見せないように懸命に努力します」

大人になっても一緒に入り続けるなんて…どういう拷問ですか？

「もう、つれないわね」頬を膨らませながら言う。

いい歳して頬を膨らませないでください。でも、何故か妙に似合ってるんだよね。

「そういえば、お母様何か用があったのではないですか？」

「そうそう！遼一を探しに来たのよ」

「僕をですか？」

「遼一に会わせたい人がいるの」

「一体、誰です？」

「美希ちゃんのお母さんよ？」

とりあえず、その日の午後、涼子に連れられて遼一は円城寺家に向かっていた。

「お父様は行かなくてよかったのですか？」

「ん？ ああ、祐一さんならお仕事があるよの？」

「…またですか」

「ええ、どうやら浩司さんに呼ばれてお仕事みたい。一ヶ月ほど帰って来ないらしいわよ？」

「そうなんですか」

一ヶ月ってどんな仕事だろう？ 浩司さんのことだから裏関係かな？

「まあ、祐一さんでも一ヶ月かかることだからよっぽどのことね」

「お父様なら大丈夫じゃないですか？」

「ふふふっそれもそうね。さあ、ついたわよ」

涼子が運転する飛空艇に揺られること30分、円城寺家についた。

ピンポンっとインターホンを押すと玄関から執事さんがでてきた。

「お、奥様！連絡をくださればこちらから行きましたのに！」

「あら？そんなことをしなくてもいいのよ？それよりも中にいるのかしら？」

「ええ、いらっしやいます。さあ、中へどうぞ」執事さんがそう言うって中へ案内する。

「「「いらっしやいませ！奥様、ご主人様」」」

前もそうだったけどさ、なんで、僕ご主人様なんだろう…おぼっちゃま的な奴じゃないの？

「あらあら、遼一がご主人様だなんて、どうにかなっちゃいそう♪」
頬に手をあてて悶える。

「お母様しっかりしてください。あなたのご主人様は僕のお父様ですよ」

壊れないでください。絶対これは趣味の悪い、いたずらに決まっています。

「趣味が悪いとは失礼ね」綺麗な黒髪で緑色の目をした美女が階段から降りてくる。

「誰もそんなことは…」

「勘よ♪」そういつて笑顔を見せる。

な、なんなんだこの人！第六感でもあるのか？人外的すぎるだろ！

「あら、人外的っておもったでしょ？でもそれもすぐになれるわ。あなたは将来、この家のお婿さんだから」

ぴくっと涼子が反応する。

「美鈴^{みすず}、あなた今、なんていったかしら？」そう言つて笑顔で殺気を出す。

こっちも人外的だった！ば、僕は関係ないぞ！

「だ・か・ら・将来、遼一君が美希のお婿さんになるのよ」

「どうやらお話が必要のようね」そういつて戦闘態勢に入る。

「やだ怖いわよ涼子♪子供離れできないのも考えものよね？遼一君」

「え？あ、まあそうですが…あなたは誰ですか？」

「あらごめんなさい私としたことが…初めまして遼一君、私は円城^{えんじよ}寺^{うじ} 美鈴^{みすず}、美希のお母さんで将来、あなたのお義母さんよ？」

「そんなことぜったいたいさせないわ！」そう言つて美鈴に突っ込んで戦闘が始まった。

周りの装飾品、壁、手すりなどを破壊しまくりの魔法の連打戦になっ
ていた。

家、壊れるんじゃない？お母様と張り合うあの人は何者？お婿発言は
：聞かなかったことにするよ。しかし、何で僕の周りにはこんな

にキャラが濃い人がいるんだろう？：まさかあのロリ神なんかした
か？だとしたら：クロス！：無理だけどな！ちくしょう！

遼一はその戦闘が終わるのを待つことにした。

side 美鈴

「涼子鈍った？」

「まあ、最近は訓練してないし、手加減したとはいえ、全盛期より
は落ちたわね」

それでも、宮殿並にあるこの家を半壊するなんて、おかしいと思う
けど…

遼一は壊れかけた家全体を見渡す。

「あ！りょーちゃん来てたの？」そう言って美希は壊れかけた階段

を降りてくる。

「おいおい、あまり急いだらこけ——危ない！」

美希はそのまま前のめりに倒れようとする。

「風！」遼一がそう言ったら風が吹いて、その風が美希を支えて遼一のところまで連れてくる。

「まったく、だから走るなっというただらう？」

「ご、ごめんなさい」涙をこらえながら言う。

「いや、いいよ別に次から気を付けてくれれば」遼一は笑顔で美希の頭を撫でる。

あゝ魔法使っちゃたな。まあ、でも緊急時だしいいよね？

「ふふふっありがとうございますーちゃん」気持ちよさそうに目を細めながら受け入れていた。

「…涼子私の娘を羨ましそうに見ないで。見苦しいわよ」呆れながら言う。

「くっ！う、羨ましいなんてお、思ってるわよ！」

「お願いだから自重しなさい。遼一君に嫌われても私はしらないわよ」

「き、嫌われたくないから…が、我慢するしか…！」

やれやれ、こんなにも親ばかだなんて、昔のあなたが見たらなんて言うかしら？

遼一君は天才だわ。たった5歳で魔法が完全に制御ができて多分、あれくらいだと、大規模魔法も出来るんじゃないかしら？でも、気のせいかしら？魔力を全然感じなかったんだけど。これは涼子に聞くとして、とりあえずこれは絶対に婚約を勧めないとね。将来が楽しみだわ。

美鈴は黒い笑みを浮かべた。

ぶるっ！

なんだ？今の？ものすごく嫌な感じがしたんだけど…まあいいか。

s i d e o u t

「そう言えば美希、どうして来るのが遅くなったの？」

「…寝てたの。眠かったから」目をこすりながら言う。

うん、可愛いです。そのまますくすくと育ってください。

「りょーちゃんは何しにきたの？」

「僕のお母様が急に美希のお母様に会いに行くって言ったから」

「そうなんですか？お母様」

「美希ちゃんもちろんよ？まあ涼子に遼一君と来てっていったんだけど」

「そう言えばどうして僕の名前を？」

「美希ちゃんから聞いていたのもあるけど――」そう言って遼一の耳に顔を近づける。

「浩司さんから小さな天才ハッカーって聞いて興味がわいたの」そう言っすぐに顔を離す。

「なっ！」

浩司さん！？何言ってるんですか！？てか小さな余計だろう！

「まあ、知らない番号に電話してたみたいだからちょっと聞いてみただけよ？」

ちよつとだけでそこまでしゃべらすんかい！！どんな手を使ったんかい！！

「美鈴あなたまたやったの？」

「やったっていつでもお話よ？」

「まあ、あれば一番手っ取り早いけどね…。でも精神的に…」

「浩司さんなら大丈夫わよ？」

「祐一さんは無理ね」

「お母様さつきから何を…？」

どんな恐ろしい手を使ったんだよ…

「何でもないわ。それよりも私たちは話があるから美希ちゃんと遊んでおいで」笑顔で言う。

「わかりました。美希、一緒に遊ぼうか」

「うん！私の部屋で遊ぼう！」そう言って遼一を連れて行った。

side 美鈴

お互いに向かい合いながらテーブルの椅子に座る。

「それで？話ってなんなの？」

「話ねえ…。さっきのを見てねすごいなって思ってたね」

「さっき？もしかして遼一が助けたあの？」

「そうよ。涼子と私が助けようとしたとき遼一君が簡易詠唱だけで助けたよね？それに私の気のせいじゃなければ魔粒子を使ってまかったわ」

「…魔粒子を使わないわけじゃない。どうしたの急に？」

「ごまかさないで、正直に答えて」

「…遼一は魔粒子を使わないで魔法を使えるわ」ふーっとため息をつきながら言う。

「…いつ気づいたの？」

「気づいたのは三歳で初めて魔法を教えた時よ？」

「三歳？いくらなんでも早すぎない？」

「娘の菜々子の時も三歳だったわよ？問題なかったわ」

「菜々子ちゃんは天才ね。血筋なのかしらね？」

「さあ？それはわからないけど、でも私と祐一さんと違って、菜々子は細かいことは苦手な方よ」

「へえーそこは二人のところは受け継いでないんだね。でも…魔法

は同じ感じ？」

「もちろん、今でも小国位なら一瞬で消せるわ」笑顔で言う。

「…相変わらずおかしいわね」

「あなたも同じでしょ？」

「まあ、それは今、置いというて、遼一君は？」

「…遼一が生まれてからは…驚きの連続だったわ」

「どうということ？」

「初めて本を見せたとき、字を読んだのよ」

「はい？それはもともと読んでいたのではなくて？」目を大きく見開いて言う。

「それはないわ、だから、正直驚いたわ。それで、携帯型の端末を渡したんだけど。すぐに理解して応用したわ。まるで元々から知

っていたみたいに」

「…遼一君は天才なの？」

「それだけならまだよかったんだけど…三歳になってから魔法を教えたんだけど、MWを持たないで、魔粒子も使わずに2m級の発火の魔法を出したの」

「はい？今…なんて言ったの？」

「MW無しでさらに魔粒子を使わず魔法を出したのよ」

「…おかしすぎるわね遼一君、魔粒子だけでなくMWもなしだなんて…。でも、他の人にバレてないよね？」

「魔粒子を感じけるのは私たちくらいだし公言してないからバレてないわよ？」

「それならいいんだけど、バレたらモルモットって可能性も——」

バンツ！つと机を叩く音が響いて静寂が訪れる。

「…そんなことになったら消すわ…全て」冷たい表情でそうつぶやく。

あははは、ヤバイ！流石にやりすぎちゃった！

「ごめんなさい。さすがにそれは言いすぎたわ」美鈴は頭を下げて謝る。

「…悪ふざけでも冗談がすぎるわよ？」

「ごめんごめん」

涼子は呆れてふーっと息を吐く。

「祐一さんは大丈夫だって言うけど…。やっぱりね心配なのよ親として…」俯きながら言う。

「まあ魔法がものすごく使えるっていうのも考えものよね。私達が歩んで来た道のように」

「そうよね：だから、そんなことにならないためにもなんとかしなくちゃいけないんだけど：」

「問題があるの？」

「遼一はね、達観しているのよ。私達の助けがいらなくらい」

「隙がないってことね。それはすごいわね」感心したようにうんうんと頷く。

「菜々子は魔法の制御法を教えたりしてサポートしてあげたけど：。遼一は：いらないうだったわ」

「まあ、今日のあれを見ればねえ：」

「どうすればいいのかしら：。私、親としてちゃんと出来ているかな？」少し俯きながら言う。

「そうね：私は影から見守るでいいと思うわよ？」

「影から？」

「助けが欲しそうな時、困っている時、悲しんでいる時、辛そうにしている時、そんな時に助けたり、話を聞いてあげたりなどしてあげればいいんじゃない？それが親ってものじゃない？」

「…そうね、そうよね！それが親よね！ありがとう美鈴！あなたに相談して良かったわ！」涼子は笑顔で言う。

「いいわよそのくらい。ねえ、それなら、お礼として…遼一君を美希に出来ないかな？」

「無理よ。遼一は立花家の長男よ？跡取りなんだからダメよ！」

「そこをなんと「無理よ！」…うん、わかった」涼子が今にも殺しそうな目をしてきたので取りやめた。

本当に変わったわね涼子、私は今の涼子、結構好きよ？

涼子は微笑みながら睨みつける涼子を見ていた。

「どうしても？」

「一生やらないわ！！ずっと、ずっと私の下から離さないわよ！」恍惚とした表情で言う。

うん、やっぱり前言撤回するわ。ものすごく気持ち悪くなりました。

side out

「どうかしたの？ りょーちゃん？」

「いや、何でもないよ」

ものすごく寒気を感じただけど…気のせいだよね？

「そう言えばお母様達何を話しているんだろうね」

「さあ？ それはわからないよ。ねえ、おままごとも飽きたな。他に何する？」

「りょーちゃんの魔法みたい！」

「え？ えっとそれはちよつと…」

ダメなんだよ…見せたら一生お風呂をお母様と…ガタガタ

「ダメなの？」 目に涙をためながら上目遣いで遼一を見る。

グハッ！ こ、こ、心が！ え、挟られる！！

「そ、そんなに魔法見たい？」 少し慌てて言う。

「見たい！ 見たい！ 見せて！」 きらきらした笑顔で言うてくる。

「もちろんいいよ！」

いや、これは頷くしかないよね。…バレなきゃいいんだよバレなき

や。

「とりあえず、基本の魔法を見せるね」

遼一はそう言って指先に火、水、風、雷、を出す。

「すごい！すごい！すごい！」ぴよんぴよんと跳ねながらはしゃいでいた。

いやゝこんなにはしゃがれるとはねゝ。嬉しいですよ。正直嬉しいですよ。

「よし次はこれだ」遼一は丸いボール型にして、美希の周りをくるくる回らせる。

「きゃははは♪待て待て！」美希はそれを追いかける。

うむうむ、これは無邪気でか可愛らしいですなゝ。あゝ和む。

遼一は慈愛の目で無邪気にはしゃぐ美希を見ていた。

「どうもお邪魔しました」

「夕飯は本当によかったの？」

「いいのよ。私が家で作るし、しかも久々の二人っきりだし♪」頬に手を当て悶える。

「…それが本命みたいね。遼一君気を付けてね？」

「…もう慣れています」がくつとうなだれながら言う。

「慣れは怖いわね…それと、後でサプライズがあるから」

「はい？」

「ふふふっ楽しみにしていてね？」微笑みながら言う。

「変なことを遼一にしないでしょうね？」

「しないわよ。涼子とは違うわ」

「私もしないわよ！」美鈴を睨みつけながら言う。

「それじゃあ、またね美希」

「うん、またね」そう言って手を振ってくる。

こうして飛空艇に乗って家に帰った。

とりあえず、ご飯食べて、お母様とお風呂入って部屋のベットの
上で寝っ転がっている。

何気なく端末を開いてみたら

着信 59件

メール 54件

恐ろしい数になっていた。恐る恐る開いてみたが…全部お姉さまで
した。

とりあえず、電話をかけてみる。…サウンドオンリーで

「ひくっ、うっ！りよ、りよーちゃん、会いたかったよ。あ、あれ
？ど、どうして声だけなのかな？も、もしかして、私の顔が恥ず

かしくて見れない感じなのかな？えへへへ！そ、それならそうと早
く言ってよね！私ビックリしちゃったよ。今日は一回も出ないか

ら心配していたけど、なんだ！私の顔が恥ずかしくて見れなかつ
たのか！そ、それってもしかして、わ、私に惚れちゃったの！

？だ、だとしたら両想いだよね。運命ってやつだよ？も、もう色
々と限界だよ！は、早くアイタイヨ！あれ？思わず会いた過ぎて

片言になっちゃったよ! やっぱり——」

10分後

「お、お姉さま、本当に申し訳ありません。電話をしなくて

うん、全て聞き流したけど、耳が痛いよ。

「うんうん、恥ずかしくて出られないって時あるよね。私はないけど」

「実は、今日、美希の家に行っていたんですよ。それででられなかったんですけど…言い訳ですよね」

「へ? い、今なんて言ったのかな?」

「え? いやだから美希の家に…」

「何もしてないよね? りょーちゃん?」

あれ? なんで声がすごく低くなっているんだろう?

「ただ、魔法を見せただけで終わりましたが…」

「そ、そうなんだ。それならいいんだよ。全然問題ないよ」

問題ない? 何が? …分かん。

「それでは、僕は今日、疲れたので寝ますね」

「うん、わかった。おやすみーりょーちゃん」

「おやすみなさい」そう言って電話をきった。

あゝ、疲れたしそろそろ寝るか。

遼一はベットに潜り込んで、寝る体制を取る。

ピリリリリ

「あゝ誰だ寝ようとしたのに」遼一は不機嫌になりながら携帯をとる。

番号は知らない番号だった。

「もしもし、眠いんだけど切っていいかな？」不機嫌度MAXで言う。

「あら？眠かったの？どうしようー平穏がなくなるよー？」

「申し訳ありませんでした。とりあえず要件をお願いします美鈴さん」

「あらら？声だけで分かったの？…もしかして私に惚れた？」

あんたもそんなキャラ？ものすごくストレス溜まるんだけど…！

「・・・」

「ちょっと、無言はひどいんじゃない？」

「∴要件をどうぞ」

「魔法を美希に教えてくれない？」

「美鈴さんが教えればいいでしょう？」

「私は人に教えるのに向かないのよ。だから、魔法が得意で同年代の遼一君に」

「∴どこまで僕のこと知ってます？」

「魔粒子やMW無しで魔法が使える位までだけど」

おい、ほぼ全てじゃねえかよ

「断ったら？」

「無論、平穏が――」

「謹んで美希様の教師役をすることを申し上げます」

「うんうん、やっぱり子供は素直がいいよ」

なんの躊躇いもなく脅しているあんたも欲望に素直だな！

「それが、お・ん・な・よ♪」

「…何も言っていないせんが」

「勘よ♪」

「そうですか。わかりました。で？いつからにします？」

「明日からお願いね？遼一君の家で」

「…わかりました」

「美希が魅力的だからって襲っちゃダメよ？」

「しません！」

こうして一日が終わった。

5話 優秀って怖いな・・・

どうも6歳をもう少しで迎える遼一です。今は春ですね。ちなみに僕の誕生日は4月10日です。今は4月9日です。いやゝ早いですねゝ一年経つのは。そう言えばお姉さま結局去年は一度も帰って来ませんでした。勉強が忙しいみたいですね。でも最近お姉さまの様子がおかしいです。勉強のしすぎで病んでいるのでしょうか？TV電話をするたびにニヤニヤしながらもう少しだよゝりょーちゃんとか言ってくるんですよ！なんか怖くないですか！？「りょーちゃんのお命まで後何日ゝ♪」みたいな感じで！そのおかげで毎日電話がかかってくるたびに恐怖しています。ストレスで禿げそうですねゝ。

遼一は、部屋の中でアニメを見ていた。まさに極楽の一時である。

日本のアニメは最高だね。この世界でも日本のアニメのクオリティが高い。いや、発展しているよ。アニメの世界のキャラクターを人間と区別がつかないくらい精巧に作ったロボットなんて居るし、実際最初見たとき驚いたね。これがロボットなのか！普通に人間だよね！？って思うくらいにゝ。それでも充実しているから――

ピリリリリ

そんな音が携帯から聞こえてくる。

遼一はうんざりしながら携帯をとる。

『お姉様』

遼一はとりあえず無視することにした。

しかし、携帯は絶え間なく鳴り続けている。

「だー！もう、少しは諦めるってことをしようよ！」遼一は不機嫌になりながら携帯をとってTV通話にする。

「お姉様、一日一回にしませんか？毎回同じ感じで終わるんでそろそろ限界と言うものが…」疲れきった表情で言う。

「ふふふっ、いいよ別にもう必要ないから」にやにやしながら言う。

「それ言うの何回目ですか…」

「この日を、この日をどんなに待ち続けたことか…」遠く見ながらにやにやする。

「…きっていいですか？」

「うふ、うふふ、うふふふふ」

ピッ

遼一は携帯をきった。

こんな感じが毎日毎日続いているんですよ。正直、恐怖意外、何も感じません。この日っていつなんだろう？ま、まさか！？

僕の誕生日に関係あるのか？

いや、ないな。関係ない。だってお姉様は毎年おめでとうって言ってくるだけだし、僕の思いすごしだろう。

次の日遼一は誕生日を迎えた。

「おめでとう遼一、あなたも今日で6歳になるのね。早いものだから」黄色のドレスを着た涼子が言う。

「ありがとうございますお母様」黒の小さなタキシードを着た遼一が言う。

立花家の誕生日は正装で行われる。理由としてはパーティーの気分を味わうためと言っている。貴族のほとんどがパーティーを開い

て壮大にするが、立花家はやるのが面倒で何で自分の誕生日なのに気を使わなければいけないのかと言うのが事実だ。そういう訳もあって立花家は家族だけで誕生日は行われる。

「そう言えばお父様はどちらに？」

「ふふふっ祐一さんはケーキとプレゼントを迎えに行っているわ」
そう笑いながら言う。

「ん？ そうですか。でも今年はお母様の手作りケーキではないのですか？」

「今年はいつもと少し違うのよ？」ちらつと遼一を意味ありげに見る。

一体、今年は何が違うんだ？ あっ！もしかして…

「もしかして、円城寺家も来るんですか！？」

「ハズレ、残念でした決して美希ちゃんではないわ！」不機嫌になりながら言う。

「いや、美希とは言っていないんですが…」

「それでも違うの！」ぷいっと顔を横に向きながら拗ねる。

「お母様、子供みたいに拗ねないでください。大人として恥ずかしいと思いますよ」

「でも遼一は美希ちゃんみたいな子供が好きなんですよ？」目に涙をためながら言う。

「…確かにそうですね」

あんなに素直で良い子が嫌いなはずがないですよ。

「へ？じゃ、じゃあ、け、結婚とかしたいの？」今にも泣きそうになりながら遼一の肩をつかんで揺さぶる。

「はい？」

「だ、だだ、だから、け、けけ、結婚したいくらい好きなの？」がくがくと震えながら言う。

「妹みたいな感じだから、結婚っていうのは違いますけど…。その前に恋愛を知らないんですが…」

前世でもそうだったけど、恋愛したことないし、知らないんだよね。

「あれ？しし、知らないんだ。そ、それならべべべ、別にいいかな」そう言いながら後ろを向く。

何をごまかそうとしてるんだろう？

「…そそ、そう、じゃ、じゃあ、私と美希ちゃんどっちと結婚したい？って言われたらどっち？」真剣な目で遼一を見る。

「…いや、それは美希ですよ」

「やっぱり美希ちゃんのが好きなの！？愛しているんですよ！？」ブンブンと遼一の肩を激しく揺さぶる。

「な、なんでそうなるんですか！？親子は結婚無理でしょう！？常

識ですよ!」

「法律を変えればどうともなるわよ? 今から日本を――」

「やめてください! そんなことのために国を潰さないでください!」
遼一は家から出て行こうとする涼子を必死で止める。

ピンポンと玄関のチャイムが鳴る。

涼子は、はっとして出る。

「遼一、玄関に行ってみて」先程とは違い、嬉しそうな感じにいる。

インターホンよ。あなたは偉大だ! この国の危機を救った英雄だ!

そう思いながら玄関に行ってドアを開ける。

「りょーりょーちゃーりょーん!!!!」そんな声が聞こえた瞬間遼一は正面からきた衝撃で後ろに倒れそうになる。

「ッ! イタタタ、お、お姉様!? ど、どうしてここに!?」慌てて言う。

「会いたかったよ会いたかった。あ! ちなみに今日はずっとこのままだからね? 一生でもいいけど」菜々子は亮一に抱きついたまま言

う。

「一生は遠慮しておきますし、一日中でも嫌なんですが…」

「いいじゃないか。今日くらいは許してあげなさい」祐一が言う。

「…わ、わかりました。そ、それよりも！まだ学校があるのではないですか！？」

「これ見て！」菜々子はそう言って一枚の紙を取り出す。

遼一はその紙を受け取って内容を見る。

『本校の生徒である立花 菜々子は国の魔法特別待遇人になったため出欠、成績に関係なく卒業出来ることを確約いたします』

「な、なんですかこれは？なにかの冗談ですか？」

「本当だよ？これからずっととりよーちゃんといられるよ？」笑顔で言う。

「お、お父様、これは一体どういうことです！？」

「うむ、実はな冬休みの時にそういう話があつてな、菜々子は天才だから国に申請して見ればどうかと言われてな。申請したら見事に通つてな。春休みにはもう小学校に行かなくてもよかったんだが…。どうしても遼一の誕生日にあわせたいと言うから仕方なく今日になったんだ」

つまり、魔法特別待遇人は中学校卒業まで保証されて義務教育なの

で飛級はできないがどこの学校に所属していても卒業は自動にできるという意味だ。

「でも、小学生ならば普通に卒業できると思いますからあまり関係ないような気がします…」

「授業料、施設拡充費などは全てにおいて国が負担するし、お金ももらえるんだよ？」

「け、結構すごいですね。しかし、お姉様はどのくらい頭がいいんです？」

「高校生レベルって言うていたよ。すごいよね菜々子は」祐一はそう言っ

て菜々子を撫でる。

しかし、菜々子は祐一の手を振り払う。

「りょーちゃんに撫でて欲しいの！りょーちゃん撫でて！」そう言う

って遼一の腰に手をまわした状態で頭を差し出す。

「あ、はい、こうでいいですか」ゆっくり丁寧に頭を撫でた。

「むふふふ、とりあえず二年間はそのまま生きていけるかも」顔が真っ赤な状態で言う。

「いやいや、流石にそれはないですよ。それよりも大丈夫ですか？顔がかなり赤いですが…」遼一はそう言っ

て菜々子の額に手を当てる。

「あっ！ひ、額に手が…。う、嬉しいんだけど、そこは普通、額じ

やないかな？」少し不機嫌に言う。

「いや、これでも十分にわかるんですが…。熱ないですね。いたって健康です」

その前にお姉様が風邪をひくってというのが想像できないな…。

「りょーちゃん、私が風邪ひいたら看病してくれる？」

「ええ、それはもちろん。自分の姉ですからね」

「ごっほっ！げほっ！りょーちゃん。私、風邪ひいちゃったかも」
手で口元を押さえながら言う。

「いや、さっきまで普通に元気だったと思いますが…」

「きゅ、急性風邪症候群にかかったの！」

「聞いたことないんですが…」

「ほら！いつまでみんなそこに居るの！早く入って来なさい」

「あ、お母様。言いつけ守ってくれましたか？」

「ええ、もちろんよ。条例だからね」

「それはそれはよかったです。でもこれはなんですか？」

菜々子は携帯を取り出して涼子に見せる。遼一の寝顔の写真だ。

「そ、そそ、それは何かしら？」急に涼子は動揺する。

「今は無理ですから、後でたっぷり聞きますから」にやにやしな
がら言う。

「う、ううう」涼子はがくつとした。

「お父様、あれはなんですか？」

「遼一、世の中にはふれてはいけないものがあるんだ」哀愁漂う感
じで言う。

一体なんなんだ。そんなに危険なものなんだろうか…。

「はい、りょーちゃんお誕生日おめでとう！」菜々子は箱を遼一に
渡す。

「プレゼントですか？ありがとうございます」

「あっ！慎重に開けてね？」

「あっ、はい」遼一は言われた通りに慎重にテーブルの上に出す。

「こ、これはケーキですか？」

『りょーちゃんお誕生日おめでとう』と書かれたショートケーキが中からでてきた。

「そ、その、私の手作りケーキなんだ。良かったら食べてほしいな、なんて」少し不安な表情で言う。

「いただきます」ナイフできってフォークでとって食べた。

「美味しいです。お姉様、とっても美味しいですよ」遼一は笑顔で菜々子に言う。

「ほ、ほほ、本当に！？嬉しいよ！私嬉しくて死んじゃいそうだよ！！」ぴよんぴよん跳ねながら喜ぶ。

やっぱり、お姉様もまだまだ子供ですね。遼一は慈愛の目で菜々子を見る。

「良かったわね菜々子。練習したかいが、あったじゃない」

「そうだな。よく頑張ったな菜々子」

二人も嬉しそうに目を細める。

「ねえ、ねえ、りょーちゃん。私が毎日、ご飯作ったら食べてくれる？」

「ええ、もちろんですよ。でも他の料理も作れるんですか？」

「…これから練習するよ。でも、本当に毎日食べてくれるんだよね？」

「上達したのであればいつでも食べますよ?」

「今の言葉きっちり、録音したからね?」

「はい?なぜその必要が?」

「まあ、いいよ。今は知らなくても…。ふふふふ」不敵な表情を浮かべながら言う。

「そ、そうですか。お、お母様?どうしてそんなに…。」

「菜々子、今のボイスレコーダー、消しなさい」涼子が笑顔で言う。

な、なんで怒るんだ?

「残念ながらお母様、これは一生大切にします。その時が来るまで真剣な表情で言う。」

「…娘のあなたには魔法は使いたくないんだけど…。それでもダメかしら?」

「これは絶対に譲れません。邪魔をするのであれば、お母様を倒すまでです!」菜々子は両手にE系統の双剣を構える。

「そう、なら私も!」涼子もE系統の双剣を構える。

「いくわよ!(いきます!)」

そう言ったと同時に二人の剣がぶつかり合う。二人の攻撃は凄まじ

く、エネルギー刃が飛び交いまくる。

「あら、つよくなったのね。でもこれはどうかしら？」凄まじい勢いで炎がエネルギー刃に纏っていく。

「いけ！」かなり大きいエネルギー刃が連続で菜々子に飛んでいく。

「はっ！」菜々子は水をエネルギー刃に纏わせて全てを撃ち落としていく。

「…本気を出すしかないのかしら？」そう言って双剣を構える。

「お母様、私は負けませんよ？」そう言って前方に双剣を突き出す。

「お父様、止めなくていいのですか？」

「遼一、世の中には逆らってはいけないものがあるんだよ」哀愁漂う感じで言う。

いや、突っ込まないぞ。決して何も言わないからな。

「僕が泣いたら、やめるでしょうか？」

「たぶん、速攻でやめると思うぞ？」

「では——お母様！お姉様やめてください。僕のお誕生日の日に

喧嘩なんて――!!」遼一は目から一筋の涙を流しながら言う。

「りよ、遼一!?!いや、その、ご、ごめんなさい」

「りよ、りよ、りよーちゃん!ごめんね。喧嘩なんかして…」

二人とも遼一を抱きしめながら言う。

「遼一は将来、役者になれるな」祐一がぼそつと呟いた。

ばきっ!つと音が祐一の足元から響く。

「うん? なっ! ここ、これは、ぼ、ぼ、ボイスレコーダー…」祐一は拾い上げて愕然とした。

このあと祐一は菜々子に嫌われて泣いたのは言うまでもない。

次の日、遼一は日課になりつつある美希の家に魔法を教えに行く。

「それでは行ってきます…ってお母様、お姉様来るんですか…」

「当たり前よ? いつもそうしてるじゃない」

「離れるのはイヤだ!」

なんなんだろうね…。本当に…。

「わかりました。けど邪魔はしないでくださいね？」

「もちろんよ」

「わかってるよ」笑顔で言う。

本当に分かっているのかな〜お姉様…。

「お待ちしておりました」美希の家の執事さんが玄関で待っていた。

「いつもありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそいつもお嬢様のために本当にありがとうございます」

そういえば…名前聞いていなかったな…。でも今更だよね。

「セバスチャン今日もよろしくね？」

「はい、奥様お任せ下さい」

「よろしくね！セバスチャン」

「はい、お嬢様、お元気で何よりです」

…セバスチャンって言うのか！？そうだったのか！？

「それでは行きます」そう言って出発する。

「お母様、セバスチャンって言うのは…」小さな声で言う。

「ん？あ、セバスチャンって言うのは優秀な執事に与えられる称号よ？」

「そ、そうなんですか」

「家事や格闘、など色々なスキルを兼ねそろえているわ。いわゆる完璧って言う奴よ」

「完璧ではありませんよ。私もできないことはありますよ」

「そうかしら？あなたは色々できると私は思うわ」

「ありがとうございます奥様」

とりあえずセバスチャンでいいよね？

美希の家について、早速、美希に会いに行った。

「あ！ななちゃんお久しぶり！」

「美希！元気にしてた？」二人は抱き合う。

感動の再会ってやつだな。

「あ、りょーちゃん今日もよろしくね？」

「ああ、もちろんだよ。じゃあ早速行こうか」

「ねえ、私もついて行っていない？」菜々子が言う。

「ええ、いいですけど、邪魔はしないでくださいよ？」

「わかってるよ。それじゃあレッツゴー！」そう言って歩き出す。

「お姉様、こっちですよ」そう言って菜々子を引っ張る。

「うん、このまま連れていって」そう言って遼一に全体重をあずける。

「疲れるからイヤです。離れてください」

「イヤだ」そう言って遼一の腰にしがみつく。

「…お姉様、本当にやめて欲しいんですが」

「ななちゃん、嫌がっているからやめたほうがいいよ」

さ、流石、美希だよ！よくわかっているじゃん！いい子です！

「ムムム、でも・・・」

「ちょっと耳かして」そう言って菜々子の耳に近づく。

「嫌われちゃうよ？それは嫌でしょ？」

「ッ！それは絶対にイヤだ！！」そう言って遼一から離れる。

「何を言ったの？」

「秘密だよ？」そう言って口到人差し指をあてる。

うん、かわいいです。和みます。ほのぼのします。

「そう？まあ、いいか。じゃあ行こうか」そう言って訓練所に向かった。

「相変わらず広いよね」

美希の家にある訓練所はかなり広い。学校で言う体育館の広さの2倍はあると思う。

「さて、早速だけど、基本の魔法から派生させていこうか」

「うん」そう言って美希は右手を前に出してE系統の指輪を構える。

E系統の指輪は杖と同じで魔法とエネルギーを合わせて使うため、魔力をそんなに使わなくていい。そのかわり威力は限界がある。

「美希の得意な魔法は水と風だったから、補助関係の魔法を伸ばしていこうか」

「補助？どんなの？」首を傾げて遼一を見る。

「まあ簡単に言うと、人の手助けだよ。治療をしたり、身体強化をしたり、後衛から攻撃したりっていう人のことだよ」

「それってりょーちゃんを助けられる？」

「うん、もちろんそれもできるよ」

「それならやる！」笑顔で答える。

「わ、私もりょーちゃんの補助したい！」菜々子はそう言って遼一にしがみつく。

「いや、でもお姉様は補助系の魔法は不向きなのでは…？」

「そ、それでも、努力でなんとかするよ！だからお願い！私にも教えて？」必死に頼み込む。

「わ、わかりました。そこまで習いたいのなら」遼一は気圧されながら言う。

「やったー！！じゃあ早速やろう！」笑顔で言う。

なんでこうなるんだろう？どう考えても補助系の魔法はいらないと思うけどな…。

「では、早速始めたいと思いますが補助をするのに大切なことはな
んだと思います？」

「莫大な魔力！」

「人を思いやる？」

「美希、よく知ってるね！すごいよ！」そう言って頭を撫でる。

「うん、ありがとう」嬉しそうにしていた。

菜々子は私は？私は？という目をして遼一をみる。

「お、お姉様、不正解だったのですが…」

「え！そ、そんな…」がくつと落ち込む。すると美希が菜々子に近
づく。

「ななちゃん、大丈夫だよ次、頑張ろうよ」そう言って背伸びをし
ながら頭を撫でる。

「うん、頑張る」目に涙を浮かべながら言う。

どっちが年上だよ…。

「補助に必要なのは人の力をはかり、その力に合わせて魔法をかけるというものです。ある程度慣れれば、簡単に分かるものですが慣れないうちは魔力が多かったり、少なかったりして大変な目に合わせてしまいます。だから、補助をする人は大変なんですよ」

「じゃあ、どうすればいいの？」菜々子が言う。

「相手の力、要するに魔力を感じれるようにすればいいんだよ。お姉様は分かりますよね？」

「そうね。魔法を使ってくれたらどのくらいかわかるわ」

「それを最初に覚えて欲しいんだ」

「出来るかな？」

「大丈夫、美希には素質があるから、練習すればできるようになるよ。できるようになるまで一緒に頑張ろう」

「美希、私も手伝うわ。：ライバルは対等じゃないといけないし」
ぷいっと横を向く。

ら、ライバルですか：さすがですね。スタートは同じじゃないと嫌って言う奴ですか。素直じゃないな」。

「じゃあ、美希が魔力を感知できるようになってからお姉様も始めましょうか」

「うん、そうだね」

こうして補助の魔法の練習が始まった。

夕方、美希の魔法の練習を終えて、三人は家に帰宅した。

「ご飯出来るのに時間がかかるから先にお風呂に入ってきてなさい」

「はい」

「お姉様、先にどうぞ」

「一緒に入るよ？」笑顔で言う。

「お姉様、先にどう——いえ、一緒に入りましょうか」何故か涼子が懇願するような目で訴えてくるので遼一は了承した。

「うん！じゃあ行こうか！」笑顔いっぱいで言う。

お風呂に向かっている途中、遼一は菜々子に話しかける。

「お姉様、さっきのお母様、変じゃなかったですか？」

「ん？そうだったかな？気のせいじゃないかな？」少し口角をあげながら言う。

絶対何かあったな。それじゃないとおかしいよあの様子…。

「そうですか…。やはり、気のせいですね」

「うんうん、そういうことで入ろう♪」

とりあえず、一緒にお風呂に入った。

え？様子はどうだった？面倒臭いので割愛させていただきます。

お風呂からあがった遼一は、ご飯を食べて、部屋に入った。

「とりあえず、勉強はしないといけないよな」そう言って携帯端末を取り出して、魔法理論、科学、化学を勉強をする。最近はこの寝る前の日課になりつつある。

「それにしても、最近やけに頭に入るような…」そんな疑問を思いつつも勉強をしていく。遼一は完全記憶と言うまでにはいらないが一回見たらほとんど把握できるのである。

また、あいつ関係か？最近、全然連絡してこないから確認のとりようがないんだよな…。まったく、連絡先位教えろよな。

神は連絡は一方的にしてくるだけでこちらからかけても、番号が存

在しないためかけれない。

あゝ疲れたし、そろそろ寝るか。

そう言ってベットに寝転ぶ。

疲れていたのか遼一はいつの間にか意識は深い底に落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8346x/>

科学と魔法の異世界

2011年11月15日08時06分発行